女病

彩杉　厚智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女病

【Ｎコード】
Ｎ０７３１Ｖ

【作者名】
彩杉　厚智

【あらすじ】
郁子にとって親友の千絵は憧れの存在であり、ライバルでもあった。彼女のようになりたい、そして何か一つでも彼女に勝るものがほしい。幼いころからそう願い続けた想いは６年ぶりに会った今でも変わらぬ激しさを秘めていた。自分でも病的だと自覚するほどのその想いはとどまるところを知らない。千絵に関係するものは全てほしいと思う郁子は彼女が身につけるものも彼女が愛する人も奪おうとしてしまう。

序

私はきっと病気なのです。
心というか、精神というか、性格というか。
女という外見に包まれた私の内面的性向は自分でも思いもつかない方向に歪んでいるのです。

久しぶりに仰ぐ故郷の空は大きい。
これが空だ。
淡い青色がどこまでも深く優しく澄んでいて、眺めているだけで心が軽くなるようなふんわりとした浮揚感に全身が落ち着かない。砂浜に仰向けになって見つめ続けていると自分も青く同化してしまったような感覚になす術もなく引きずり込まれてしまう。抗いようもない怖いほどの無限の包容力。
ああ、これこそが本当の空なのだ。
つい先日まで私がそれと信じていた高層ビル群に支えられている角ばった都会のあれは今思えば映画のスクリーンのようにどこまでいっても作り物という味わいでしかない。
水平線の彼方から何のためかは知らないが性懲りもなくわざわざやってきては砕け散る幾千幾万の波の音を聞きながら私はゆっくりと目を閉じた。
かまびすしいほどの鳥の鳴き声。かぐわしいとは言えない鼻につく懐かしい磯の香り。ごつごつとした肌触りの粗野に吹きすぎる海風。
やっと帰ってきた。
とうとう帰ってきてしまった。
千絵のいるこの小さな港町に。軽快なリズムがない、寂しい自由がない、ドライな付き合いがない、どろどろとした快楽がない、だ

けど千絵がいるこの私の生まれ故郷に。
私は上体を起こし海に向かって小石を投げつけた。とぷん、と溺れる小石の最後の声が風に運ばれて微かに聞こえる。もう一度投げる。とぷん。もう一度。とぷん。手の届く範囲にある石という石を全部否応なしに海に与えつくしてようやく私は諦めたように立ち上がった。
いずれはこうなるんじゃないかと思っていた。そしてやはりこうなってしまった。結局逆らいようのない運命だったんだと思わずにはいられない。
それが良いのか悪いのか、私には分からないのだが。誰にも分からないのだが。

1

「帰ってきたのなら電話ぐらいよこしなさいよ」
電話の向こうで千絵は声を弾ませながらひどく嬉しそうに怒っていた。
それだけで再確認できる。千絵は私のことを好きなのだ。小学生の頃から。二十五歳の今も変わらず。
「ごめん、ごめん。引越しやら再就職やらで忙しくって」
確かに私の毎日は帰郷の感傷に浸る時間もなくめまぐるしく過ぎていた。
この三ヶ月で私の生活はＣＭやチラシで見る筋トレグッズの「使用前」「使用後」のように劇的に変化していた。
二年と少し勤めた都銀を辞め、学生の頃から住んでいたマンションを引き払い、二人の姉が嫁いでいって部屋の余っていた実家に転がり込んで、日々なけなしの貯金を切り崩しながら就職の面接に追われていたのだ。
我が実家は贔屓目に見ても裕福とは言えない。それは私が大学進学のために一人暮らしを始める前と何ら変わっていなかった。父親は絵に描いたようなしがないサラリーマン。母親は近所のスーパーにパートに出ている。二人の肩には還暦を迎えるまで無くならない家のローンが重くのしかかっていた。
そんな彼らも三人娘のうちの上の二人が結婚してしまって寂しかったのだろう。大学進学で上京して以来ほとんど梨のつぶてだった私の突然の帰省を戸惑いながらも喜んでくれているようだった。当初は年賀状のくじで一等が当たったときに番号を何度も確認するような半信半疑の目で私を見ていたが、最近は毎朝毎晩顔をあわせることにも慣れてきて、私の定住がどうやら本気らしいと少しは安心しているようだった。
帰ってきた理由をあれこれ詮索することもせず「少しは羽を伸ば

して、のんびり遊んでいればいいじゃないか」という彼らの言葉に甘えていられるほど私の神経は太くなかった。家賃を払わなくても良いということだけで私には十分すぎるほどありがたい。私は千絵に限らず地元の友人の誰にも帰ってきたことを知らせることもしないで、暇があれば毎日求人情報誌とにらめっこをしつつ、せっせと多種多様な企業に電話を掛け人事担当者の元に足を運んだ。

「駅前の信用金庫なんでしょ？新しく口座を開いてあげたいけど私はもう持ってるから今度母か兄にでも作らせるわ」

任せといてよ、と千絵は太鼓判を押した。

私の就職を誰から聞いたのだろうか。

私は受話器を耳に当てたまま小首を捻った。しかし毎日窓口に座っているのだからこっちで気付いていないうちに知り合いに見られていてもおかしくはない。就職して一週間。千絵の耳に入るまでの時間としては短くないのかもしれない。この小さく閉鎖的な街では情報は驚くほど早く正確に伝わっていくのだ。

学生のときに一緒に就職活動をした友人が未だに理由は分からないのだが取り付かれたように金融業に憧れていて彼女と行動を共にしているうちに気がつけば私は運良くある都銀から内定をもらった。昨今は学歴ではなく人物重視で採用すべきとうるさく言われているおかげで、一流企業でも学歴偏重ではないことを社会へアピールするためなのかよく言えば協調性のある、他と合わせることしかできない二流大学の出身者を採用するということが目立った。そういう時勢でなければ採用されるはずがなかったと今でも私は思っている。そして金勘定が好きなわけでもなく人と接するのが得意でもない私ではあるがやはり今回の就職先も金融業だった。

英語が特別できるわけでも、人に自慢できる資格を持っているわけでもなく、そこそこの学歴しかない私に興味を持ってくれる企業はこんな田舎町でもごく稀で、形だけの面接で不採用という会社が多い中で前歴の都銀という響きに杉田という四十がらみのこの信用金庫の面接官は食いついてくれた。

初めから雇う気のない人事担当者は口調もそっけない。言葉の端々に、どうせ採らないんだから何訊いたって意味ないんだけどね的な投げやりなものが垣間見える。数をこなすうちにそういうものは感覚として分かるようになっていった。

しかし、杉田の反応は違った。私を雇いたいという雰囲気がその甘さと鋭さを兼ね備えたような双眸から伝わってくるのだ。垂らした糸に少しでも引きがあると私は魚が餌を突付く感触に全神経を集中させた。自分が一番可愛く見える角度に顔の位置を固定し控え目な笑顔を絶やすことをしなかった。他に売るところがないのはこれまでの面接で痛いほど分かっていた。悪い印象を与えない程度の愛嬌は惜しむことなく振りまかねばならない。

前の会社を辞めた理由には、母親の体調が悪く自分の世話をろくにできない父の面倒をみる人間が必要なためと平気で嘘をついた。同僚の彼氏を立て続けに三人つまみ食いして社内の人間関係がこんがらかり、その中の一人がストーカーとなって腐った魚のような濁った目で毎日毎晩私の生活を見張っていることに耐えられなくなったなどとは口が裂けても言えなかった。

「あの信用金庫ってここ二ヶ月で二人も窓口係が辞めたみたいよ。セクハラが原因なんだって。郁子も気をつけてね」

本当に親身に私のことを心配してくれているのが分かる。千絵は優しい子だ。こちらが苦しくなるほどに。

千絵からの情報で何故私がこんなに簡単に採用されたかが分かった。先方はとにかく頭数が欲しかったのだろう。年度の中途で採用するなら私のような紛いなりにも実戦経験のある人間の方が使い勝手が良いというものだ。

理由は何でも構わないと私は思った。とにかく私はこの町で当分食べていくことができるようだ。贅沢を言える立場ではない。

「ねえ。久しぶりに会おうよ。郁子の顔が見たい」

来た、と思った。来てしまった。まるで遅れていた生理が来たときのように安心と憂鬱でないまぜの気分になる。

私から誘ったのではない。
これは重要な事実だ。私は自分を納得させるために心の中で何度も呟いた。千絵が会いたいと言うから会うのだ。私からはそのようなことは一言も口にはしていない。
私はゆっくりと受話器を下ろすといやがうえにも弾む心を抑えて髪を梳いた。

2

店内は昔のままだった。地層のように幾重にも堆積したいろんな物の焦げた臭い。油の上にさらに油の滲みた不衛生な壁。誰のものか定かではない解読不能の黄ばんだサイン色紙。灼熱の太陽の下でビールジョッキを手に爽やかに笑う水着女性の色あせたポスター。何もかもが怖いほど変わっていない。何から何までじっくりと煮染めたような愚鈍な色で統一されている。所々に補修や買い換えの形跡があればノスタルジックな気持ちにもなるのだろうが、あまりの変わらなさに却って何の感慨も湧いてこない。

白のTシャツにフリースの上着を羽織り、こげ茶色のコーデュロイパンツという相変わらず飾り気のない格好の千絵は一番奥の席で杏仁豆腐を食べていた。

ここの杏仁豆腐は絶品だ。寒天がもちもちしている。控え目の甘さが丁度良い。高校生の頃、私たちは学校帰りにこの店に来てはこの杏仁豆腐だけを注文して二時間も三時間も話し込んでいたものだ。

俯いてスプーンをゆっくり口に運ぶ千絵も当時と何ら変わってはいない。海草をイメージさせる黒く長かった髪は少し短くなった気もするが、その微かな光をも逃さず集めて柔らかく反射させる豊かな艶は完全に昔のままだ。くすみ一つない淡い象牙色の張りのある瑞々しい肌も衰え一つ見せていない。そして何よりも千絵が周囲に放つ柔らかい存在感或いは場を和ませるような雰囲気というものが微塵も変わっていないのだ。

私は・・・。私は変わっただろうか。

髪を染め、化粧を施し、爪にネイルアート、耳にピアス、指にリング、そして何人もの男を知った私は六年前と比べてどうなのだろうか。変わったと思われるのも、変わっていないと言われるのも同じぐらい気が滅入りそうだった。

「転んだの？」千絵は私を見るなりそう言った。到底六年ぶりとは

思えないほど重みのない声で。「肘に砂がついてるわよ」
「ああ、砂ね」
的外れな返事で済ませて、砂浜で風に吹かれていたからとは言わなかった。緊張を紛らわせるためになどとはもっと言えない。カウンターの奥に杏仁豆腐を注文してから椅子に腰を下ろす。古びた木製の椅子が微かに軋んだ。
「ほんとに、久しぶりねぇ」
感慨深げにしげしげと見つめてくる千絵を見て私は久しぶりだという感動の欠如に戸惑っていた。彼女と正対していると時間の流れから隔離されたような気分になる。昨日も会っていた気がする。一昨日もこの吸い込まれそうな深く黒い瞳に嫉妬したような感覚がある。昨日から今日への移り変わりの間に伸びた爪の長さ程度にしか千絵は私に変化を示してくれない。六年という歳月には不自然なほど自然に私は千絵を受け入れてしまっていた。そう思えるということはつまり私の中味が成長していないということになるだろうか。私は失望せざるを得なかった。
「郁子、きれいになったわ」
「ほんと？ありがとう」
千絵に誉められて、私は素直に喜べなかった。なぜなら千絵は昔からこれ以上きれいになりようがない美しさなのだ。努力してきれいになる私とは根本から違う。これは単なる私のひがみなのかもしれないが。
杏仁豆腐と美しく円いお好み焼きが姿を見せた。
運んできた店の亭主には見覚えがなかった。白髪頭にねじり鉢巻。紺のトレーナーにベージュのエプロン。何となく高校生のときも彼だったような気がするが彼でなかったような気もする。あんなに足繁く通っていたのに覚えていないなんて不思議なものだ。いや、別段不思議ではないのか。あのとき私は千絵だけを見ていた。
「お好み焼き食べるの？」
私は訊かずにはいられない。実は、少なくとも私はここでお好み

焼きを食べたことなど一度もないし、千絵が食べているところを見たこともないのだから。ここで食べたのは杏仁豆腐、ソフトクリーム、お汁粉、あんみつ・・・。私たちはこの店を甘味処と理解していた。この店でお好み焼きを食べる。それはちょっとした冒険のようにさえ思える。

「食べるわよ。お昼まだだもの」

それにここはお好み焼き屋だし。1＋1＝2と同じような響きで当然のことのように千絵は言ってのけた。

たっぷり塗られたソースの匂いが私の鼻の奥を刺激する。ゆらゆら揺れる鰹節。千絵が割る割り箸の音。

「おじさん、私も同じもの」

昼にカレーを食べてお腹は減っていないが私は躊躇しなかった。

千絵はお好み焼きを小さく切り取っては本当に美味しそうに次々と頬張る。また一つ口に運ぼうと千絵が少し俯いた瞬間、千絵の首筋に、白いTシャツの内側に小ぶりのクロスが光った。シルバー製だろうか。私は声を出さずにひっそりと、だが、かなり驚いて息を詰めた。

今まで千絵が何か装飾品と呼ばれるもので身を飾っているところを私は見たことがない。千絵は着飾るという言葉とは対極にいるような存在なのだ。

しかしそう思っているのは私だけなのかもしれない。千絵にしてみればネックレスをするのもしないのも大した差はなく、その日の気分次第でこれぐらいのものは身に着けるのだろうか。垣間見えたネックレスはシンプルな造りのもので千絵の美しさを邪魔せず、客観的には似合っていると言えるのだろう。しかし私には違和感が残った。

私は目の前の杏仁豆腐に対して完全に興味を失っていた。スプーンに手を伸ばすこともせずカウンター越しにおじさんに無言で催促してしまう。

お好み焼きは千絵と一緒に食べるから美味しいだろうと思って注

文したのだ。千絵が食べ終わってからでは何の意味もない。
「ここの奥さん、去年亡くなっちゃったのよ」
千絵が店主に聞こえないように小声で言った。
そう言われても私は「奥さん」を思い出せなかった。そういう女性が居たような気もするし居なかったような気もする。何故なら私は千絵だけを見ていたから。
「おいしい？」
私が訊くと千絵は子供のように無邪気に微笑んだ。歯に青海苔が付いているのが見えたがそれも千絵らしくて私は何も言わなかった。

3

荷物の整理が思うようにはかどらない。
実家に戻ってきてからの二ヶ月は、部屋の片づけは仕事が見つかってからにしようと後回しにしていた。仕事が決まらないうちは気分が落ち着かない。仕事が始まれば規則正しい生活を送ることができ余裕も出てくるだろうと思っていたのだ。しかしそれは甘かった。いざ仕事が始まると日々の業務や人間関係に思いのほか心身が疲労し、たまの休日に、さあ部屋を片付けようという気にはなかなかなれないのだった。
元来私はくたびれやすいのかもしれない。肩こりはひどいし低血圧で貧血気味。熱しやすく冷めやすい飽き性なのだ。
部屋の中はベッドと服とダンボール箱。服さえクローゼットに仕舞えば黄土色の箱だらけの殺風景な部屋もこれはこれで片付いているようにも思えてくる。味気も色気もないと思い切ってこのさっぱりとした空間を壊すべきか・・・。
箱からあれやこれやと引っ張り出して配置や色合いを考えだしたら今日という休日さえも疲労で塗りこめることになりそうだ。寝ている子を起こすのはもう少し後にしたい。
そのとき、考えを巡らしているだけでベッドに腰を下ろして何もしたくない私に救いの手を差し伸べるように携帯電話が鳴った。
圭介からだった。
圭介か、と私は思った。なぁんだ、ではない。やったー、でもない。嫌だなぁでも、珍しいな、でもない。圭介か。ただそれだけ。圭介からの電話を受けても今は精神的な負荷がない。
七年も付き合っていると誰でもこういうものなのだろうか。それとも私が淡白なだけなのだろうか。
決して嫌いなわけではない。好きか嫌いかと訊ねられれば好きと答えるだろう。隣に居てこんなに気持ちが動かない相手は貴重だと

思う。圭介の傍ではつらいことも悲しいことも疲れも憤りも全て忘れて安らかな気持ちになれるのだ。だからこそこんなに長い間一緒に居られるし、これからもずっと傍に居て欲しいと素直に言える。

背が私よりも7ミリ低く、物静かで、色白で、目が良くて、よく風邪をひき、健康にうるさい圭介。今思えば彼に対して愛ははじめからなかったような気がする。だが圭介に出会えたこと、圭介と付き合っていられることを私は本当に幸せなことだと思っていた。

「仕事が早く終わっちゃってさ。今から会えないか？」

「願ったり叶ったりです」

私の心は途端に晴れ上がった。

圭介に会うのは一ヶ月ぶりだ。高校を卒業してから私が三ヶ月前に実家に戻ってくるまでほぼ六年間ずっと遠距離の付き合いだった。その結果、私が向こうにいた間に一ヶ月に一度会うというペースが出来上がってしまい、私がこちらに戻ってきてからもこのペースは崩れてはいない。会おうとすれば毎週でも毎日でも会える。しかし私は今のままで良かった。今のペースが私たちのリズムなのだ。何かを変えれば他の何かも変わってしまう。それが怖かった。

私は弾む心を抑えながら素早く下着だけを取り換えグレーのパーカーに袖を通し、ごわつくブーツカットのジーンズを履いた。階段を駆け下り玄関の下駄箱から取り出したスニーカーに足を突っかけ、小走りに家から歩いて二、三分の公園に向かった。色気のいの字もない格好だがこれでいいのだ。

圭介は仕事帰りだと言った。家業の塗装業を手伝っている圭介は作業着で現れるだろう。私だけが気合の入った格好をしてもしかたがない。それに、きっと会ったらすぐに隣町の国道沿いのホテルに行って裸になるのだ。一時間ほどしか着ていない服にこだわりを見せなくてはならないような付き合いではない。雰囲気を保てる程度の下着さえ着けておけば圭介は不満なく私を扱ってくれる。快楽という名の癒しで私の心に澱のように蓄積された日常の疲れを拭い去ってくれる。そうすれば私も満ち足りた気分で明日からの仕事に取

り組めることになる。
銀杏の枯葉が舞う秋真っ只中のその小さな公園には人っ子一人いない。
私はブランコに腰を下ろして軽く漕いだ。お尻から伝わってくるひんやりとした鉄の感触と揺れるたびに辺りに響く金属の摩擦音が私を少し寂しい気持ちにさせる。圭介が来ればこんな切なさは跡形もなく霧散してしまう。そう思うと私はなおさらゆっくりとブランコを漕いだ。汗をかけばかくほどビールが美味しくなるように、孤独を味わえば味わうほど圭介が現れたときの幸福が素晴らしいものになるという我ながら幼稚な哲学だった。
空を見上げれば高いところにぽつんと千切れ雲。砂場にはままごとの跡の泥団子が三つ。角度の低い日差しに泳ぐ私の影が今にも泣き出しそうな顔をしていたので私は慌てて飛び降りた。私は本当に泣きそうになっていた。鼻の奥がつんとする。
圭介は驚くほどすぐにやってきてくれた。電話を掛けたときは実はもう近くまで来ていたのだと言う。少し照れながらそう言って笑う圭介はこの秋の空のように懐が深くて素敵だった。私がイエスの返事をすることを予想していたような行動が私は嬉しかった。圭介に会えて得た幸福感は思っていた通り素晴らしいものだった。
会社の名前がプリントされたバンに乗り込むと予想通りのペンキの臭い。文句は言わず、しかし息苦しさに窓を少し開けた。
圭介はただ「よし」とだけ小さく呟いて車を出す。「よし」は圭介の口癖だ。何か行動を起こすとき圭介はいつもそう口にする。自分に暗示をかけるように。全て上手くいっていると自分に言い聞かせるように。
私は圭介の「よし」が好きだ。何もかもがこれで始まる。心の準備ができるし気合も入る。
どこに行く？何をする？なんてまどろっこしい下手な探りあいはしない。セックスがしたくないなら電話の段階でそう言っている。私たちはもう大人になったのだ。圭介の「よし」だけで十分だ。

ホテルに着くと圭介はすぐにシャワーに向かった。私は圭介の汗のにおいは全く気にならないがペンキ臭い身体に抱かれるのは嫌だった。言葉にしなくても圭介は私の気持ちを分かってくれている。

圭介が浴室に入っている間、私は部屋の案内に目を通す。部屋の設備。カラオケの使い方。会員カードの特典。どのホテルに行っても私はこの儀式を欠かさない。このホテルも初めてではないのに全く新しい気持ちで全ての説明に耽る。

ラブホテルに詳しくなっていくのは何故こんなに楽しいのだろう。どうしても部屋の中の全てを知り尽くしたくなる。ただ一つの目的のために存在する空間。全てのものがセックスを楽しむために用意されている。その潔さ、混じりけのなさが清々しくて私も純粋に全力でこの空間を味わってやろうとするのだ。

4

「よし」
言ったのは圭介ではなく私だった。私はうつ伏せの姿勢から寝返りを打って仰向けになった。圭介は上半身を布団から出して煙草をふかしている。その無駄な肉のついていない白く華奢な肩が私は好きだった。
圭介は存分に私を味わった顔をしている。私も圭介の体温を全身で堪能した。もう何も言うことはない。身体の中のもやもやが晴れて明日を迎える勇気ができた。
「さっきは顔が険しかったな」
「誰の？」
「そりゃ、郁子のだよ」
「私？いつ？」
「公園で待ってたとき。目が吊り上がってる気がしたよ。身体も重そうだった」
これが圭介だ。七年間も付き合っているだけあって私のちょっとした変化を敏感に感じ取ってくれる。そう思うと不意に私は目頭が熱くなる。少し弱音を吐きたくなる。
「エネルギーが切れてきたのかも。最初の一ヶ月は何も分からなくて疲れてることも分からなかったけど、最近は少しずつ慣れてきて勢いもなくなっちゃった」
「新卒のときも五月病になって少し寝込んだもんな」
「そうね。あの頃は同期がたくさんいたから愚痴もこぼせたけどね」
「でも都会の大手銀行に比べれば仕事は楽なんじゃないの？」
「仕事はね」
仕事は問題ない。書類の書き方、伝票の整理の仕方やオンラインの端末の操作方法など覚えることは山ほどあるが基本的には金融機関ならどこだって同じだし時間が経って慣れてくれれば自然と覚えて

いくだろう。お金を扱うので神経は使うが、ポイントさえ掴んでメリハリをつければ苦になるほどのものではない。

しかし人間関係は違う。最近嫌に疲れるのはこれが原因だった。

田舎町の信用金庫は客だけでなく職員も地元の人間が多い。直接の顔見知りはほとんどいないが、どこかで何かが繋がっている人が少なくない。

歩いて三分ほどの近所だったり、中学校の担任が同じ教師だったり、母の高校の同級生だったり。誰と話しても自己紹介しているうちに必ず何か一つは共通のネタが見つかる。

中途採用の私には同期と呼べる同僚がおらず、それほど外交的な性格でもないので当分の間は新参者として借りてきた猫のように隅の方で小さくなっていようと思っていたのだが、意外にもはじめましてのその日から会う人会う人話題には事欠かなかった。そのときは、こういうところが田舎のいいところだなぁ、としみじみありがたく思ったものだ。しかしこの親しみやすさは話の取っ掛かりとしては貴重な武器だったが、次第に疎ましくなってくるようでもあった。

あの人のお父さんが癌であそこの病院に入院した。去年結婚したあなたの同級生は姑と毎晩大声で喧嘩している。担任だったあの先生が教え子と援助交際していたのがばれて警察に捕まった。

各人からもたらされる情報があまりに身近すぎて一つひとつから受ける衝撃が大きすぎる。テレビのワイドショーとは違って、この種の噂話は陰湿な陰口のように聞こえ気分の良いものではなかった。どちらかというと聞きたくもない内容のものが多い。

他人のことならまだ聞き流せるが自分のことになるとなかなかそうはいかない。小さい街であるだけに休日に少し出歩いただけで必ずと言っていいほど同僚に目撃されている。

昨日あそこにいたでしょ？何買ってたの？一緒に歩いていたのは彼氏なの？

いちいち説明するのも面倒だし見られていると思うと家から出る

のも億劫になってくる。都会の人間ならあれこれ詮索してくることはないが、刺激の少ないこの街では誰もが周囲の人の行動にやたらと好奇の目を光らせる。一人で映画館に入ったり、本屋で雑誌を読んでいたりするときに会社の人間にばったり会うと次の日に出社するのがどうにも憂鬱になる。自分の知らないところでどんな噂が流れているか分かったものではない。私は周りの目が気になってちょっとした買い物も悪いことをしているかのようにこそこそするようになりつつあった。

今日だって公園で待っているところを誰かに見られているかもしれない。塗装屋の息子と付き合っているのか、などとニヤニヤしながら問い質されたら事実であっても気分は良くない。私は圭介の右腕に向かってため息をつく。

「ね、もう一回して」

「よーし」

圭介は何も訊かずに私の上に覆いかぶさってくる。その華奢にも見える両腕が思いのほか力強く一気に私を押し倒す。その軽い痛みを伴うぐらいの強引さが快感に滲んで私の頭を内側から痺れさせてくれる。私は鎖骨と乳房の間に掌を置き、まな板の上の鯉のような気分で圭介によってもたらされる刺激にどっぷりと全身を委ねた。

5

今度の休日に思い出巡りしてみようよ、と千絵に誘われて私は本当に久しぶりに母校を訪れた。

幼稚園。小学校。中学校。そして高校。私と千絵は計十五年間同じ学び舎に通っていたことになる。それはこの小さな田舎町では決して珍しいことではないが、私は最終学年になる頃にはいつも、千絵は都会の私立の学校に進学するのではないかと覚悟していた。明治時代から続く老舗の呉服店を経営している千絵の家はこの街で五本の指に入るほどの裕福さで私のような庶民とは違い、公立でなければならない理由などどこにもなかったし、二つ年上の千絵の兄は中高一貫教育の有名私立校に進学していたからだった。しかし千絵は何食わぬ顔で私と同じ公立の学校に通い続けた。

私は何度か勇気を出して千絵に尋ねたことがある。

中学から私立の学校に行くの？高校はどこにするの？どうして私立を受けなかったの？

千絵の答えはいつも簡単だった。郁子がいないから。こんなこと言われたら涙が溢れてきてもしかたがない。そして事実私は家に帰り部屋に閉じこもって存分に泣くのだ。嬉しいのでも安心感でもない。心に何かが迫ってくる。気を抜くと涙が勝手にこぼれていってしまうのだ。

千絵の車で最初に向かった幼稚園は校舎が新しくなっていた。そのせいか思い出があまり浮かんでこない。

小さな砂場。小さなアスレチックジム。小さなブランコ。小さな鉄棒。どれを見てもびっくりするほど何の感慨も湧いてこない。

それは千絵も同じらしく小首を傾げながら、「こんなのあったかな？」を連発している。

その中で漸く私たちをノスタルジックな気持ちに引き込んだのは校舎の脇にある飼育小屋だった。今にも朽ち倒れそうな錆だらけの

鉄製の小屋には今は何も飼われていないようで微かに動物の饐えた臭いがするだけだが、当時はウサギと鶏がいたように思う。当番制で家から持ってきた餌を与え小屋の掃除をしていたことを思い出す。
「郁子はウサギと鶏とどっちが好きだった？」
「そうだなぁ。やっぱりウサギかな。千絵は？」
「私もウサギ」
千絵と同じ意見だったことに私はほっとする。そして深く満足して言葉を継ぎ足す。
「やっぱりウサギの方がかわいいもんね。鶏って急にばたばた飛ぶし何だか怖かった」
「そうね。それもあるけど、・・・私たち兎年生まれだもんね」
そうか、そういうことか、と私は詰めの甘さを悔やむ。
小学校と中学校は隣接している。小学生の頃は近所の子供たちと集団登校をしなければならず、友達とお喋りしながら通うのは楽しいのだが、列を組んで歩いていることに幼稚さを感じないわけにはいられなかった。小さな歩幅でちょこまかと歩いている私たちを制服を着たお兄さんやお姉さんが颯爽と追い越していくのを憧れの眼差しで見つめたものだ。
「こんなにちっぽけだったっけ？」
千絵が小学校の下駄箱を見つめて言う。確かに下駄箱も、その中に収まっている上靴も自分が想像していたよりもはるかに小さい。
私は千絵の靴がなくなったときのことを思い出していた。あれは三年生のときだったと思う。お金持ちの家に生まれたというだけで千絵は少しいじめのようなものを経験した時期があった。服や筆箱や靴やリボンがみんなのよりも少し良いものを持っているというだけで、またあいつは高いものを持っていると陰口を叩かれたりした。そんなことを言う心無い性格の持ち主はほんの一部の児童だけだったので千絵も特段気にする様子を見せていなかったのだが、ある日の放課後自分の下駄箱に靴がないのを見つけた千絵は呆然とその場に立ち尽くしていた。千絵の様子を不思議に思った私が「どうした

の？」と尋ねると彼女は突然私の胸に全身を預けるように飛び込み火がついたように大声を上げて泣いたのだった。みんなの目も気にせず千絵は私の腕の中で泣きじゃくっていた。後にも先にも千絵が泣いたのを見たのはそのときだけだ。私はそのとき初めて千絵を可愛いと思った。私の頬に当たる髪が本当に柔らかくていい匂いがした。私はいつまでも千絵を抱き締めていたかった。正直言えばこのまま靴が見つからなければいいとさえ思っていた。

私の意に反して靴はすぐに出てきた。あまりに千絵の泣きっぷりがすごかったからか隠した男の子が半べそでおずおずと私のところに持ってきたのだ。

靴が見つかって漸く泣き止んだ千絵は宝石のように輝く潤んだ瞳で私に「ごめんね」と謝った。千絵の涙で私の服はびしょびしょだったのだ。その涙の温かさを今でも私は鮮明に覚えている。周りの友達が私と千絵を心配そうに眺めていたのが私には嬉しかった。それまで千絵とは他のクラスメイト達と同じ程度にしか口をきいたことがなかったのだが、私と千絵は特別な仲なのだと周囲に知らしめているように思えたのだ。そしてその日から私と千絵は特別な仲になった。

それからの千絵はいじめられるようなことはなくなった。もともと可愛かったのだが、その頃から非の打ちどころのない美しさを体現し始めた彼女には好かれようとはしても嫌がらせをするような男の子はいなくなった。

「下駄箱っていい思い出ないな」

千絵はぼんやりと私の心を傷つけるようなことを言う。確かに千絵にしてみればいじめられたことを思い出すだけなのかもしれないが。

中学校の正面玄関の方に歩いていくとジャージ姿の男性が出てきて私たちとすれ違った。私が、こんにちはと挨拶すると男は軽く会釈を返しそのまま体育館の方に歩いていった。すれ違った後に私と千絵は顔を見合わせた。

「今のって」
「そうそう」
男は中学三年生のときに私と千絵のクラス担任の体育教師だった。しかし名前が思い出せない。それは千絵も同じようで、もっと言えば会釈一つで通り過ぎ振り返ることもしないあの先生も私たちのことを覚えていないようだった。生徒が担任の名前を、そして教師が教え子の顔を思い出せないのはそれだけ時が経った証拠だった。
「あの先生、よく私と郁子を間違えたよね」
千絵が思い出したように言い、私はくすぐったいような気持ちになる。当時私と千絵はよくそっくりだと言われた。姉妹というよりも双子と言われるほど共通している部分が多かった。
小中高と私と千絵は同じように成長した。同じようなペースで身長が伸び、体重が増え、生理が始まり、胸が膨らんだ。千絵の家に遊びにいくとたまに千絵のお母さんが千絵の着物を私に着させてくれたりしたが私のものかと思いたくなるほどいつもそれは私にぴったりだった。千絵に似合うものは全く同じように私にも似合うのだ。だからあの体育の教師でなくても私と千絵を間違う人間はたくさんいた。当の本人である私でさえ千絵の背後に立つと自分の背中を見ているような錯覚に陥ることがあったくらいだった。
千絵は私にとって親友であり憧れの存在だった。人形のように可愛い千絵と間違われると私は天にも昇るような昂揚感で満たされるのだった。
今、中学校の校舎の中を歩いていく千絵の背中は私とは全く違っている。高校二年生のときに二人とも身長は止まったのでお互い１６８センチメートルのままだろうが、先を歩いている千絵を背後から眺めても自分と錯覚するようなことはない。高校のときと同じように美しい黒髪を後ろで一つに束ねナイキの厚手のパーカーにストレートのジーンズというボーイッシュとも言える今日の千絵のようないでたちを家族と圭介以外に見せることを私は大学進学と共に卒業した。

今日の私は鎖骨が覗く淡い桃色のVネックのセーターにバーバリーチェックのミニスカートで網の細かいストッキングを穿いている。髪の色は控え目だが茶色に染めているし、ゆるくパーマもあてている。耳には小さなダイヤのピアス。首にはティファニーのオープンハート。指には鋭く光るプラチナのリング。

私が身に付けているものは全て男たちの気を引くためのものだ。私はこの世界の不特定多数の男の目を意識している。それのどこが悪い。女に生まれたのだから男にちやほやされたい。大人の男たちにちらちらと盗み見られているときの私の鼓動はその視線に気付かない振りを続けることを困難にさせるほど高く響くのだ。事実、都会に出てから寝た男の数は両手では数えられないし、その分だけ久しぶりに会った千絵よりも私の方が一回り胸が大きくなっているのは見た目でも分かるほどだ。これらの装飾品だって自分で買ったものは一つもない。私を欲しいがために跪く男だっていた。

だけど。

千絵を見ていると自信がなくなる。何が女の幸せなのかが分からなくなる。知らず知らず世間の男の要求に迎合している自分が惨めなように思えてしまうのだ。千絵は颯爽と歩いていく。まるでこの世に男も女も関係ないと言わんばかりに。セックスは子供をつくるためだけにするものだと言わんばかりに。

「小学校と高校の思い出は強いのに、中学のときのことってあんまり覚えてないのは私だけ？」

振り向いた千絵の目を私は正視できず私は咄嗟に窓の外に目をやった。

「私も覚えてない。中学の三年間ってあっという間だったよね。まだ子供だったし毎日何も意識せずにのほほんと暮らしてたような気がする」

それは嘘だった。

小学校を卒業する前から私は千絵を意識し続けていた。

千絵は誰からも慕われていた。千絵の輝く笑顔は男子生徒を惹き

つけてやまなかった。教師たちでさえ千絵には愛想笑いをし、ご機嫌を伺うような態度だった。
私は狂おしい程に千絵を羨んだ。千絵と同じ身長、同じ体重なのにどうしてこうも千絵と私は違っているのだろうか。
私は毎日千絵の傍を離れずその一挙手一投足に全神経を集中させて千絵の千絵たる秘訣を探った。来る日も来る日も私は千絵の髪型を真似、千絵の笑い方を真似、千絵の仕草を真似た。
千絵がバレー部に入れば私も入部し、千絵が風邪をひけば私も体調を崩して休み、千絵が高校入試のために勉強を始めれば私も同じ高校を目指した。
先天的なものを理由にして諦めたりはしなかった。私はどうしても千絵になりたかった。
最後に私たちは高校を訪れた。中学もそうだったが高校も部活動をしている生徒が一人もいないので不思議に思ったが、ある教室の掲示物を見てその理由が分かった。翌日からテストが始まるのだ。
「中間テスト」という言葉に千絵は嘆息した。
「テストって本当に嫌だったけど、懐かしいね。今思えばテストがあったから郁子と一緒に愚痴ったり、教えあったり、答案見せ合ったりできたのよね。そう思うとテストも楽しかったな」
「そうそう。お互いよく同じようなところで間違ってさ。二人とも間違ってるからどこがどうして間違ってるのか分かんなくってすっごく悩んだこともあったよね」
私たちは声をあげて笑いあった。当時はテストのことでこんなに笑うなんて思いもよらなかった。
「いつもは練習が嫌だったのに、テスト期間中で部活が休みになると急にバレーがしたくなったなぁ」
「行ってみる？」
私が言い出すのを待っていたかのように千絵は満面に喜色を浮かべて頷いた。
そう、この笑顔。天使のように柔らかいこの笑顔に私はどれだけ憧

れたことだろう。
体育館も案の定無人だった。閉鎖された広い空間に足を踏み入れると汗と埃とワックスの臭いが漂っていた。懐かしいね、と我慢できないように器具室に駆け出した千絵は高校生の千絵だった。
あの頃、私はここでも千絵を追いかけていた。千絵と同じようにボールを追い、ボールを拾い、ボールを打った。同じメニューをこなし、同じ量の汗をかいて、帰りに同じジュースを飲んだ。
床にボールをつくと砂漠に水をまいたように音が屋根や壁に瞬時に吸い込まれていく。千絵は慣れた手つきで二度三度と床に打ちつけたボールを私の方に放り投げてきた。白い放物線に自然と身体が反応して私は千絵にトスを返していた。そのボールを千絵が軽くスパイクする。私はボールの軌道にあわせて腕を揃える。私のレシーブを千絵がトスする。私が軽く打ち返す。
たちまち千絵の目は白いボールの動きに集中していった。難しいボールを拾ったときには千絵は最高の笑顔を見せる。その笑顔を見たいがために私も真剣にボールを追いかけた。私たちは夢中になっていた。ミニスカートの裾の動きにも頓着しない。すぐに身体が汗ばんでくる。千絵の薄化粧の頬が火照って朱に染まっている。暑い、と言って千絵はおもむろにこれまたナイキのTシャツ姿になって脱いだパーカーを無造作に床に放り投げた。
胸にあのシルバーのネックレスが輝いていた。クロスの中心部分に一際輝いているのはダイヤモンドだろう。
千絵は胸元を一瞥した。私は揺れて邪魔になるその首枷を千絵が外すだろうと思ったのだが、千絵は大事そうに首口からTシャツの下に隠しただけだった。私はそんな千絵に苛つきを覚えた。千絵の汗を直に吸うことを許された首飾りに嫉妬していた。私の心が冷たく湿っていく。
私は初めて千絵に向かって強くボールを叩いた。腰を落として構えていた千絵は素早く反応したがレシーブし損ねてボールは脇に反れた。乾いた音を立てて転々と白球が転がっていく。その行方を悔

しそうに見つめる千絵に皮肉っぽく私は言った。
「やっぱりなまったわ。昔の千絵じゃないわね」

6

月末はどうしても仕事がたまってしまう。月末にしかできないのに月内に処理してしまわなければならないものが多いのだから仕方がない。この不況で当然のことながら残業手当が十分に出るわけでもなく、どうせ何時間残業しても同じなのだから上司に気兼ねせずゆっくりやればいいと終業時刻が過ぎる頃には私のやる気は半減する。明後日が締めという今日も私はだらだらと職場に居残っていた。

「雰囲気変わったね」

脇に立った人の気配に私はパソコンの画面から目を放した。採用面接以来ほとんど言葉を交わしたことのなかった杉田がいつの間にかそこに立っていて紙コップのコーヒーを差し出してくれる。その仕草が実にさりげなくて甘いような苦いような気持ちになる。

杉田は背が高く顔も良い。女性への気配りもスマートにこなす。そんな杉田にこんなことをされると嬉しいようでその後ろに何があるのかと構えてしまう。

「そうですか？」

私はコーヒーを受け取ってとぼけて見せた。

大したことはない。ウエーブのかかった茶色い髪にストレートパーマを当て、色も黒く染め直し、バレッタで一つに束ねた。たったそれだけのことだ。

辺りを見渡せばフロアには私と杉田以外にもう一人中年の職員がいるだけだった。

「彼女、雰囲気変わりましたよね」

杉田はその中年の職員に大きな声で問いかけた。声を掛けられたその男性職員は書類の山から顔を起こしたが曖昧な返事を残して再び仕事の山に埋もれていった。声の響きにぞんざいなものがある。雑談に付き合っているほど暇ではないようだった。

邪魔する者がいなくなったと思ったのか杉田は近くの椅子を引き

寄せ馴れ馴れしく私の傍らに腰を下ろした。
「ねぇ、仕事慣れた？」
「はい。みなさんによくしていただいているので大分慣れました」
「えー。みなさんって誰？俺以外にもそんな人いるの？嫉妬しちゃうなぁ」
「・・・」
「黒い髪、いいじゃん。ピアスをやめたのも個人的には好きだなぁ。どういう心境の変化かは知らないけど俺はいいと思うよぉ」
「・・・」
二度不自然な沈黙が流れたが、私は取り合うことをせずひたすら熱いコーヒーを飲み続けた。
杉田は二年前に離婚をして今は独身だ。離婚の原因は杉田の女癖の悪さで、最近この会社を二人の女性職員が辞めているが、このことにも杉田が関係していると専らの噂だ。杉田の前妻は上層部の役員の娘で、彼女と離婚してしまったことにより杉田には出世の見込みがないらしい。
こういう情報は知りたくなくても耳に入ってきてしまうのが田舎の特性だ。千絵からのセクハラ情報も正確だったということになる。この特性を私はしばしば疎ましいと思うことがあったが今回は良い方に働いたと言えた。
杉田は私を口説こうとしている。そのことは私の首筋や膝の辺りを刺す彼の視線に如実に現れていて、女の経験上、今、私がどう振舞うかでこれからの私と杉田の関係は決まってしまうことも分かっていた。そして私は杉田を心理的に遠ざけることを即座に選んでいた。
幾らマスクが甘く言葉が巧みでも、妻に捨てられ社内の女性社員からも愛想をつかされている男に私は価値を見出せなかった。私は誰かの男に興味はあっても、誰のものでもない男に心が動いた試しはない。そんな男にどれだけ執拗に愛撫されても私の女の器は満たされることはないのだ。

「残業大変だよね」
敵もなかなかのものだと私は思った。ここで、「はい、大変です」と答えれば杉田は手伝うよと言ってくることになる。逆に、「もう終わりますからと」返せば、「じゃあ一緒に帰ろうよ、ごはんでも」という話になってしまう。ここまで社内一の色男に揺さぶりを掛けられると私も悪い気はしないが、それでも私は杉田に一瞬の隙も与えない。
「この仕事が好きですから」
私はそう言いのけて再びパソコンに目を戻した。
嘘と分かっていてもここまではっきり言い切られればたとえ杉田でも言葉が見当たらないだろう。私の予想通り杉田は、「あんまり頑張り過ぎないようにね」と愛想笑いにも見えない冴えない顔になって頭を掻きながら自分の机へと去っていった。
私は軽く伸びをして肩や首を回した。制服の下で微かにネックレスが揺れるのが分かる。足を棒にして隣町の駅ビルで漸く見つけたシルバーアクセサリーだ。思わず頬が緩みそうになる。私はとても満足していた。

7

この部屋に棲みついて四ヶ月が経とうとしている。少しずつ部屋は片付き始めていた。当初は私のすることに何も言わなかった母だが、近頃は、「いい加減に部屋のダンボールを何とかしなさいよ」と注文をつけてきた。さすがに私も色彩のない箱に囲まれる生活に飽きてきて、のそのそとだが過去の遺物を掘り返し始めている。

ＣＤや本、雑誌を棚に整理するだけでもそれなりに空間に色が溢れて格好がつくものだった。衣類をクローゼットや箪笥に仕舞ってしまうと一気にダンボールが片付いていく。大きな鏡を一つ置くだけで空間が華やかになる。少しずつ部屋の雰囲気ができてくると配置やバランスにも凝り出して時間はあっという間に過ぎていった。イメージが膨らむとあれがほしい、これが足りないという欲求まで形成されてくる。

私の集中力を殺ぐように携帯電話が鳴る。圭介からの着信だった。思わず、何よもう、と口が動く。せっかく面白くなり始めていたのだ。私は一つ大きく息を吐いて通話ボタンを押した。

「何してるかなと思ってさ」

「部屋の片付けしてたところよ」

もちろん私は不機嫌な声など出さない。私が機嫌悪く応対すれば圭介も気分を害し、結果として圭介のつまらなさそうな態度に私の不快指数が上がってしまうことになるだけだ。

「出てこれる？映画でも観ない？」

二週間前に会ったばかりなのにと首を捻りながら私は部屋の中に時刻を求めた。壁に、ベッドの上に、天井に。どこにも時刻は転がっていない。目覚ましには携帯電話を使っている。携帯電話は今私の耳元から離れられない。私は思い出したように腕時計に目をやった。三時を少し回ったところだ。

「いいわ。あの公園で拾ってくれる？」

電話を切ると私はいつものように下着を取り替えた。どんな壁時計を買おうかと考えながら。
圭介の電話でまた一つ部屋に足りないものが見つかった。そう思えば心のざらついた感触もあっという間に滑らかになっていく。
季節は冬を迎えていた。秋から冬への変化は一足飛びだ。日に日に空は低くなり、息は白くなり、私は嬉しくなる。
私は四季の中で冬が一番好きだ。春や秋は今ひとつ気合が入らない。そして暑い日差しの下に涼を求めるのと、凍てつく寒さに暖を得るのとでは、私は断然後者の方を選ぶ。寒いのが好きなのではない。ぬくぬくできるのが幸せなのだ。
私は初冬の風に首をすくめ薄手のコートのポケットに手を突っ込みブーツの踵を鳴らして歩く。数時間後に訪れる圭介の腕の中での至福を思い描きながら。
どうして男の身体はあんなに温かいのだろうか。ベッドの中で背後から抱き締められると必ず私は眠りに落ちてしまう。ごつごつした腕の力強さと背中から伝わる肌の深い弾力感が私を穏やかな気分に誘うのだ。死ぬときは男の腕の中がいいと私は真剣に思う。それが世界一幸せな息の引き取り方に違いない。あの場所でなら私は間違いなく平和な安息を手に入れられるだろう。
公園に着くと圭介はすでに待っていた。圭介の軽自動車が道路脇でアイドリングしているのを見つけ私は慌てて駆け寄った。ドアを開けて乗り込むと楽園のような暖気に包まれる。圭介は笑顔で私を迎えてくれた。
「早かったのね」
「姫をこんな寒い日に待たせちゃいけないと思ってさ」
これを幸せと呼ばずに何と呼ぶのだ。私は圭介の首筋に抱きつきたい衝動を必死にこらえてシートベルトを巻きながら圭介の一言を待った。
「よしっ」
車は色彩の乏しい冬の街並みを動き出した。圭介がどことなくご

きげんなのは顔を見た瞬間から分かっていた。特に最近圭介は私の前でニコニコしている。仕事が順調なのだろうか。それとも私が帰ってきて遠距離でなくなったのが嬉しいのかもしれない。

車は映画館には向かってはいない。間違いない。この道はいつものホテルへの道だ。だからと言って私は圭介を茶化すような真似はしない。圭介が何よりもまず私の身体を求めているということはありがたいことだ。だから私も圭介の身体を全身全霊で受け入れることができる。

私は圭介のこの車が好きだった。ペンキ臭い会社のバンよりも百万倍圭介には似合っている。広すぎない空間も必要最低限の内装も無理の利かないエンジンも素直に圭介と私には丁度いいと思う。音楽が聞けてエアコンが利いて、そして私たちをホテルへ運んでくれる。これ以上他に何を望むことがあるだろうか。

「黒髪も似合うよ」

圭介は真っ直ぐ前を向いたままそう言った。誰かさんにも同じ事を言われたなと私は含み笑いをする。同じ言葉でも主が違えば受ける感情も全然違うものだ。やはり女に飢えている感じの杉田よりも長年私を見てくれている圭介に誉められたい。仮に杉田に恋人がいれば話は別なのだが。

「黒いのが流行ってるの？」

「そうよ。私の中でね」

「なるほど」

まもなくいつものホテルは見えてくる。私たちは数分後にはよどみなく部屋を選び、慣れた足取りで部屋に向かい、ベッドの上で絡み合う。

私はそっと胸に手を置いた。千絵に似合うものは全て私にも似合うのだ。このネックレスを見たら圭介はきっと誉めてくれるだろう。そして私の身体と同じようにネックレスも圭介の愛撫を待っている。圭介の手と吐息によってシルバーに熱が伝わっていくのを感じたい。そう思うだけで私は早く服を脱ぎたくてうずうずしてくるのだった。

8

自動ドアから入ってきたその女性に見覚えがあった。
高級ブランドのスーツに何の動物かは分からないが値が張ることは疑いようもない毛皮のコート。足先から頭の先まで贅を尽くした装飾を身に纏っている。この街でこんな格好のできる人はわずかしかいない。そう考えれば推理は簡単だった。
彼女は整理券を取ることもせず真っ直ぐ私の方に向かって歩いてきた。昼前の今の時間帯は客が少なく並ぶ必要はなかったのだが、彼女は仮にどれだけ列ができていようが、私が他の客に対応していようが関係なく私の前に立とうとしただろう。彼女の歩き方にはそう思わせる上流階級特有の傍若無人なオーラがあった。
「いらっしゃいませ。大野様」
「郁子ちゃん、久しぶりね。千絵がいつもお世話になってます」
彼女が前に立つと思わず息を殺したくなるようなきつい香水の匂いが漂ってきた。
「私の方こそ千絵さんにはお世話になりっぱなしで。・・・今日はお着物ではないのですか？」
「私、実は着物は好きじゃないのよ。普段はお店があるから仕方なしに着てるだけなの。プライベートはいつも洋服よ」
シャネルのイヤリング、シャネルのバッグ、シャネルの香水。おそらく化粧品もシャネルだろう。会うたびに私は本当に彼女が千絵の母親なのかといつも疑ってしまう。それは千絵がまるっきり飾り気のない格好をしているからなのだが、そこには装飾を前面に出すこういう母親を持つからという確固たる因果関係があるのかもしれない。しかしそうは言ってもやはりこの母親からあの娘を想像するのは至難の業だった。
「千絵にせっつかれて、口座を開きに来たのよ」
「それはありがとうございます。それではこちらにご記入願います」

大野百絵。本人の氏名の欄に書かれた文字を見て私は初めて千絵の母親の名前を知った。百絵と千絵。二人は本当に親子なんだなと生々しく実感できる。名前だけを見れば仲の良い親子像を想像してしまう。実際はどうなのか知らないが。

「百と千なんですね」

私は口にしてから後悔した。百絵はこんなことを今まで何度となく言われ続けてきただろう。小さい頃から世話になっているのに初めて名前を知ったというのも失礼にあたる。

「そうなのよ。千絵って名前、姑が付けたの。表面上は私の名前から一字とったってことになってるけど、実際は私の百よりも大きい千を選んだだけなのよ。嫌味ったらありゃしない」

言い慣れているのだろう。百絵の台詞は漫才師のネタのようによどみがなかった。しかし本音が篭っているのは間違いない。百絵には百絵の苦労があるということだろう。私はどう返事したものかと曖昧な笑みを浮かべたが、百絵は顔を起こすことなく記入を続けながら言葉を繋いだ。

「でも、私に頼むぐらいなら自分のフィアンセに頼めばいいのにね。宮本さんならいい人だから口座ぐらい二つ返事で開いてくれるでしょうに」

百絵の言葉に私は愛想笑いを浮かべることさえもできなかった。千絵に婚約者がいる。完全に初耳だった。千絵が結婚する。考えてみたこともないことだ。そんな大事なことを千絵は何故黙っているのか。

「あら。私、変なこと言っちゃって。こちらで口座を開きたくないって意味じゃないのよ。郁子ちゃんが勤めていらっしゃるんだもの。喜んで作らせていただくわ」

「ありがとうございます。・・・あの・・・千絵は婚約してるんですか？」

「あら？郁子ちゃん、千絵から何も聞いてないの？千絵には中学の頃から親公認の婚約者がいるのよ。宮本さんっていって私の遠い親

戚のご子息で、お父様は不動産の会社を経営なさっていて・・・」
途中から百絵の言葉は私の耳に届いてこなくなった。
中学のときからの婚約者。つまり私はその事実を十年以上知らなかったことになる。そんなことがありえるのだろうか。私は千絵のことなら何でも知っているつもりだった。私たちは双子のように似ていると言われ、何をするにも行動を共にし、私は千絵よりも千絵に詳しいと自負していた。その私が千絵に婚約者がいることを千絵以外の人間から教えられるなんて。
似たような苦々しい経験を私は思い出さないわけにはいかない。
あれは大学受験のときだった。もちろん私は千絵が行く大学に進学するつもりで千絵にアンケートを重ねた。千絵は二つ三つ大学名を挙げてはくれたが、学部までは教えてくれなかった。どちらにせよ文系なのだから学部ぐらいは別々でもいいかと思っていた私はそこにはこだわらず願書を出した。いざ、受験というときに千絵は驚くべきことを言い出した。
「私が受けるのは、あの大学の短期大学部だよ」
福祉の勉強がしたいから。千絵は事も無げにそう言った。同じ名前の大学でも短期大学部はキャンパスが違うところにあり、本校との交流はほとんどなく、別の大学と言っても過言ではない。私は目の前が真っ暗になった。郁子がいるからと公立の高校に進学してくれた千絵はもういない。いつまでも私の傍にいてくれると思っていた千絵はあっさりと私を排除した。私は千絵のいない世界なんて考えてもみなかった。
結果として私は千絵が合格した短期大学部がある大学に落ち、他の大学に進学することを余儀なくされた。それぞれの人生と言えばそれまでだが、私は勝手に千絵に裏切られた気持ちになっていた。実家から通うと言った千絵に対し、私は一人暮らしを始めた。千絵の通学にかかる時間を私は他の事に使う。千絵より長い大学生活を貪欲に楽しむ。大学進学以降千絵と顔を合わさなかったのは私の意地だった。私は負けず嫌いなのだ。

百絵は手続きを済ませ、「とりあえずね」と五十万円を入金して帰っていった。私はその背中に頭を下げながら目の奥に重い痛みを感じ全身に悪寒による震えを感じていた。

9

冬は便利な季節だ。体調が悪いのは全て風邪のせいにできてしまう。

風邪だね。急に寒くなってきたからね。疲れがたまっていたんだよ。インフルエンザが流行っているらしいから気をつけないと。

体調が悪いので今日明日と休みたい。電話でそう告げると同僚からはこんなに優しい言葉が返ってくる。これが夏だったらあれこれ訊かれたかもしれないが、今の季節は体調が悪いと言っただけで向こうが勝手に風邪だと解釈してくれる。冬様々だ。おかげで私は心置きなく昨日からずっと好きなだけ惰眠を貪ることができた。

もちろん嘘をついたわけではない。本当に寒気を感じたし、実際に熱も出た。出社したところで仕事にならず周りに迷惑をかけただけだろう。しかし原因は風邪などではなく、千絵の婚約だということはっきりしていた。

娘が熱を出して寝込んだからといって父も母もかまってはくれない。無口な父はどうしたんだとも訊いてこないし、おかゆぐらい自分で作れるでしょと母はいつもどおりパートに出ていった。おかげで私は誰にも干渉されず何時間も私と付き合うことができた。

私にこれほどショックを与える千絵とは一体何者なのか。千絵のことでこんなにもストレスを抱えてしまう私とは何者なのか。私は布団の中ですっかりふやけた脳が行うまとまらない思考に身を委ねながら湯水のごとく時間を費やした。

遠くの方で何かが鳴った。その何かが玄関のチャイムだと気がつくのにどれぐらい時間がかかっただろうか。そうと思い当たった瞬間、反射的に私はベッドの上に身を起こしたが、まもなく再び崩れるように布団の国へ戻っていった。

携帯電話を見ると三時前だった。さっき確認したときは昼前だったのに。時間は私の知らないうちに私を置き去りにして駆け足で進

んでいるようだ。
　それでも母がパートから帰ってくるにはまだ時間がある。つまり今この家には私以外に訪問者に応対する人間はいないことになる。しかし普段この時間に私はいないのだから、今日だって私が出る必要はないだろう。せっかく来たお客さんには可愛そうな気もするが、我が家にこの時間に訪れることがまず間違っているのだ。
　そんな私の言い訳に抗議するように目の前の携帯電話が鳴った。私はびっくりして胸が縮んだような息苦しい痛みを感じた。あまりに顔に近いところで鳴ったので着信音が頭に響く。誰よ、もう、と画面を見ると千絵からだった。
「風邪なんだって？大丈夫なの」
「そうだけど・・・どうして知ってるの？」
「さっき信用金庫にいろいろ手続きに行ったのよ。それで郁子がいないからおかしいなと思って訊ねてみたら、風邪で休んでるって教えてくれたのよ」
　千絵は大野家の光熱費や携帯電話の引き落としを全て信用金庫の口座から引き落とせるように手続きを済ませてきたらしい。
「それで、今どこにいるの？」
「どこって家で寝てるわよ」
「じゃあやっぱり居留守だったのね」
　私は携帯電話を耳に当てたままカーディガンを掴みパジャマ姿のまま慌てて玄関に走った。ドアを開けるとそこには私と同じように携帯電話を耳に当てている千絵が立っていた。
「思ったより元気そう」
　千絵の声が正面からも耳元からも聞こえる。私たちはにっこりと微笑みあった。
　千絵は結婚式の引き出物のような大きな紙袋を持っていた。部屋に上がると早速千絵はその紙袋からステンレスのボールとガラスの小鉢を取り出した。ボールの中にはなみなみと杏仁豆腐が入っている。白い寒天の間に浮かぶさくらんぼやみかんの甘酸っぱそうな色

に久しぶりに私の食欲が刺激された。そういえば今日は朝から何も食べていなかったのだ。
「これって」
「そう。あのお好み焼き屋の杏仁豆腐よ」
千絵は得意げに胸を張った。今日は珍しく束ねていない艶やかな髪を掻き揚げて、おいしいわよ、と小鉢に取り分けてくれる。その病人を労わることだけに集中している無邪気な千絵の横顔に私は見惚れた。私のために千絵がここにいる。時が止まってしまえばいいのにと私は下唇を噛締めた。それが叶わないなら千絵を瞬間冷却して私のものにしてしまいたい。
私を苦しめる人間が私を救おうとしてくれる。皮肉なことだと私は苦笑するしかない。きっと彼女はいつの日か誰かの妻となっても今日の女神のような献身的な顔で良人の世話を甲斐甲斐しく焼くのだろう。何の打算もない、尽くすことを無上の喜びと感じているような表情の千絵に見つめられれば男でなくとも幸せを感じるはずだ。私にはこんな顔はできない。やはり損得勘定抜きにしては生きていけない私には敵わないのだ。
「はい、どうぞ。いっぱいあるからたくさん食べてね」
「ありがとう。でも千絵も食べてね。私だけじゃこんなに食べられないわ」
「もちろん、そのつもりよ」
千絵は紙袋からさらに小鉢を出して見せた。私たちは顔を見合わせて大きな声で笑った。
私はさばさばした気持ちになっていた。
幼いとさえ言える頃から私は千絵のことばかり見つめて生きてきた。私のこれまでの人生は千絵の周りを取り巻いていただけだ。それは千絵が最高に美しかったから。笑っちゃうぐらい裕福だったから。何をやらせても輝いていたから。それなのに誰からも好かれる人間だったから。
小学五年のある日、先生に後姿を千絵と間違えられた。そのとき

振り向いた私に彼が投げかけた言葉が私の人生を狂わせたのだ。
「双子みたいにそっくりだから間違っちゃったよ」
今思えばあれは彼なりのジョークだったのだろう。子供相手だと思って大げさな表現をしただけなのだ。しかし私は彼の言葉に雷に打たれたような衝撃を受けた。頭の先から爪先に向けて背筋を通って何かが走り抜けていった。そしてその筋道からじわじわと滲み出す喜び。私は千絵に似ている。どこにでもいそうな容姿、貧しくない程度の家庭、得意も苦手もないという才能、何となく影の薄い存在。そんな私が千絵に似ているとは。教師たちはみな千絵が好きなのだ。それなのに私を千絵と間違えた。私にも千絵になる素質があるのかもしれない。
そして私は千絵になろう、なりきろう、そして何でもいいから、どんなことでもいいから千絵に勝つんだと心に誓ったのだ。
「やっぱりおいしいわ」
得も言われない、という表情の千絵は憎らしいぐらい可愛い。私が男なら間違いなくここで千絵を犯しているだろう。しかし私は女だった。女なんかに生まれなければよかった。男は腕力で美を自分のものにできるが、女には自分が美しくなる以外に美を手に入れる道はない。そして千絵の道は真っ直ぐで平坦なのに対し、私の道程は坂と障害物の連続だった。生まれた時点で勝ち目がないのだ。千絵と同じ女に生まれた私の負けだ。
「結婚するの？」
私の突然の問いかけに千絵はきょとんとした表情を見せた。
私はその顔つきに苛立ちを覚えた。まだ私を騙し続けるのか。これでもまだ私を苦しめることに飽き足らないのか。そうか。今日の来訪も見舞いと偽って実は私が打ちのめされてくたばっている様子を笑いたかっただけなのだ。私のマイナス思考は山の斜面を下っていく土砂のごとく留まることを知らない。
「私、結婚するの？」
千絵はスプーンを銜えたまま何のことか分からないという顔つき

で私の目を覗き込んでくる。
　このしらばくれようはどうだ。私は憤りを隠せなくなっていた。鏡を見なくても自分の表情が強張っているのが分かる。顔に血が上りこめかみの辺りで脈が怒りのリズムを刻み出したかと思うと急に視界がぼやけて身体の平衡感覚が保てなくなった。千絵の端麗な顔立ちが歪んで見える。私はさりげなく腰をおろしていた床に手をつき自分を支えようとした。ここで退いてはいけない。千絵という人間の白黒を見極めなくては。
「千絵のお母さんが言ってたわよ。千絵には中学からの婚約者がいるって」
「婚約者？誰のこと？」
「隠さなくていいよ、全部聞いたんだから。宮本さんっていう人と結婚するんでしょ？ずっと前から親公認の仲なんでしょ？どうして私に黙ってるのよ。どうして何も言ってくれなかったの？隠す必要なんてないじゃない」
　私は自分が止められなくなっていた。気付いたときにはぼろぼろと溢れる涙でパジャマの袖を汚し先日気に入って買ったばかりの小さなテーブルに突っ伏していた。自分の腕の中に顔を伏せながら私は思った。勝てないわけだ。千絵はこんな醜い涙は流さない。
「郁子。私、まだ結婚なんて考えてないよ。宮本さんはいい人だけど、そういう相手じゃないの」
「もういいよ」
　私は泣きじゃくっていた。私は何が悲しくてこんなにみっともなく泣いているんだろうか。裏切られた気持ち、顔も知らない男への嫉妬、鈍感な自分への嫌悪。
　千絵が結婚したって私に害になることなど何もないはずなのに。私は千絵にこの涙をどう言い訳すれば良いのか。風邪をひいているから情緒が不安定なの、では無理がある。千絵が結婚したらと思うと寂しくて。これでいこう。
「もしもし。お母さん？」

私が顔を起こすタイミングを見計らっている間に千絵は電話を掛けたようだった。
「私が結婚するってどういうことよ。結婚したいだなんて一言も言ったことないわよ。・・・宮本さんのことを婚約者だって言ったんでしょ？私、婚約なんてした覚えないわ。・・・不服？不服とか不満とか、そういう問題じゃないでしょ。第一、宮本さんだって迷惑だわ。・・・えっ？そんなこと私は知らないわよ。とにかく勝手に私の結婚を決めないで。結婚相手は私が自分で決めるから。・・・だからそんなことは知らないって。ほっといてよ、もう！」
千絵はものすごい剣幕で電話越しに百絵に食って掛かっていた。空いている右手で何度も何度も髪を掻き揚げ、幼い児童のように頬を紅潮させ、あたりに唾が飛んでいることにも頓着していない。彼女がこんなに怒っているところを私はかつて見たことがない。いつも朗らかに笑顔を浮かべているというのが私の中の千絵像であり、その千絵が怒りに我を忘れるということは私の経験上初めての出来事だった。
私は呆気にとられていつの間にか顔を起こし千絵の様子に見入ってしまっていた。怒りに震え眉根を顰める千絵も凛としていて素敵だった。髪を梳いていく指があまりに白くて私はそのせわしない軌跡に目を奪われていた。
「失礼しちゃうわ」
通話を終えても千絵は携帯電話を握り締めていた。怒りという心理的作用に慣れていないのか、自分自身の御し方が分からなくなってしまったかのように大きく息を吸ったり吐いたりしている。口をパクパクする様子はまるで魚のようだと私は思った。朱に染まっていたはずの千絵の顔から見る見る血の気が失せていく。
「千絵？」
「・・・なんか頭がふらふらして気持ち悪い」
そうこうしている間にも千絵の顔色はどんどん悪くなっていく。
「千絵！ちょっと、早く横になって」

私は千絵を後ろから抱きかかえるようにして自分のベッドまで運んだ。ぐったりしている千絵は病み上がりの私には意外に重かった。私たちは倒れこむようにしてベッドに転がった。

今までずっと一緒にいたのに同じベッドで千絵と寝ることなんて初めてのことだ。千絵の顔が本当に目と鼻の先にある。千絵の白い首からは何か芳しいものが匂い立っているようで私はさらに千絵に近づいた。千絵がこちらを向いて弱々しいながらも微笑んでくれる。こんなに近いのに千絵を見つめる私は私でしかなく、私を眺める千絵はやっぱり千絵だ。私はどうあがいても私を見下ろす千絵にはなれない。私は千絵を見下したいわけではない。千絵になりたいのだ。しかし非常に悲しいことだが、幾ら近づいてもなりきることまでは不可能だった。

横になると千絵は少し楽になったようで顔色も少し戻ってきていた。先ほどまで髪を梳いていた右手で千絵は私の頬を優しく撫でた。泣いていたことをすっかり忘れていた私は恥かしさに顔を伏せ布団の端で顔を拭った。

「郁子は圭介君と付き合っているんでしょ？」

「え？どうして？」

「本人から聞いたわ。この前、圭介君にばったり会ったのよ」

「そう」

それから私は肯定も否定もできずいつまでも黙っていた。

10

快気祝いをしよう、と言い出した千絵が指定してきた店は電車で南へ十五分ほどの隣町に新しくできた駅ビルの最上階にあった。この隣町と私や千絵が住む町とは人口的にも交通の便から見ても大した差はないのだが、この駅ビルが今年オープンしたことによって二つの町に顕著な差が生まれてくるだろうと予想されている。そしてその予想が現実となるのは誰の眼から見ても明らかだった。

ビル内には名の通ったブランド店が軒を並べ、ビル全体におしゃれで高級感漂う雰囲気を作り出している。その今時の空気が多くの人間を惹きつけているようだった。ブランド志向の流れはここら辺りの田舎にも浸透し始めている。若者だけではなく中年の域に入りかけている女性たちも値の張るものを持って気取りたくてしかたがない。そういう購買欲だけに的を絞ったビル側の戦略は今のところ功を奏しているようだった。かく言う私もこの駅ビルにすでに何回か訪れている。胸に人知れず飾っているシルバーのネックレスもこのジュエリーショップで購入したものだった。

私がこのビルに着いたときには千絵の指定の時間からすでに十五分遅れていた。性懲りもなく言い寄ってくる杉田を適当にあしらいながら雑務を片付けていたら思いのほか時間を食ってしまったのだ。これぐらいの遅刻をとやかく言う千絵ではないが、せっかくの千絵の好意を仇で返すようなことはしたくない。私はエレベーターに飛び乗り一目散に最上階を目指した。

千絵に会うのは私が号泣し千絵が憤激した日以来だ。私は千絵の前で涙を流したことなど一度もなかったし、千絵が顔色を変えるほど誰かに怒りを露わにしたところを目撃したのも初めてだった。長年付き合っている友人なのに涙も憤りも知らなかったことに寂しい驚きがある。この歳になってまたお互いがお互いをさらに理解することになった。そう思うとエレベーター内の階表示が最上階に近づ

くにつれて妙に照れくさいような窮屈な気分が兆してきた。だが、店に入り店員に席まで案内されたときには私はその軽いいたたまれなさを瞬時に忘れていた。

席には千絵以外にもう一人いた。見るからにみすぼらしい男。少し小太り気味で怠惰さをイメージさせるたるんだ咽喉周りの贅肉、見たこともないような趣味の悪い紫色のネクタイ、漫画でしか見たことのないような野暮ったい黒ぶち眼鏡、肌はつやつやと若々しいのにすでに後退し始めている前髪。彼は何もかもが完璧な千絵の隣にいるべき人種ではなかった。

「郁子、遅かったじゃない」

千絵は立ち上がって私を迎えてくれた。先日の剣幕とは程遠い、いつもの柔和な千絵だった。

「ごめんね。なかなか仕事が終わらなくって」

私は努めてその男を視界に入れないように千絵に向けた視線を固定した。どうしても男が千絵の知り合いだとは思いたくなかったからだ。千絵の隣に座っているのだから千絵と無関係な人物であるはずはないのだが、何かの間違いであって欲しいと思わず願ってしまう。

「こちらは、宮本修一さん。ほら・・・」

この前話題になった宮本さんよ、と千絵の目が言っている。男は立ち上がって、「宮本です」と私に会釈してきた。男は私や千絵よりも身長が低かった。圭介が私よりも身長が低いのに対しては何の感慨もないが、この男についてはそれだけでも侮蔑の気持ちが湧いてしまう。

「彼ね、前々から郁子に会ってみたいって言ってたの。ほら、郁子を抜きにしては今までの私の人生って語れないでしょ。私と宮本さんも結構古い付き合いだからよく会話に郁子の名前が出てくるんだけど、顔が分からないとイメージがつきにくいじゃない。だから一度会わせてみたいなって私も思ってたの。それでね、この前、郁子が風邪をひいて仕事休んでるって言ったら心配してくれて、快気祝

いやろうよって言い出したのも宮本さんなの。ここを予約してくれたのも彼なのよ」
私は自分に嫌気がさすぐらいぎこちない動作で挨拶を返していた。
私は今日までに自分の中に無意識に宮本さん像を作り上げてしまっていたことに気付いていた。ここに至るまで私の中での宮本さんは見上げるほど背が高く、高価なものを着こなしながらもそれが嫌味でなく、プロ顔負けのワインや料理に対する造詣の深さで、白くしなやかに伸びる指を持ち、セックスのときには巧みにこちらの羞恥心を煽るような言葉を耳打ちしてくれる大人の男性だった。私は独りよがりだったと自分を責める余裕もないほど彼へのイメージと本人とのギャップの歴然たる大きさに動揺していた。この男が千絵の婚約者だなんて百絵は一体どこに目をつけ何を見ているのだろうか。
店員が寄ってくると千絵は、先ほど注文したものをお願いします、と告げた。宮本は黙って水を飲んでいる。私はそれを見ているだけでまたみぞおち辺りに怒気が動くのを感じた。店員とのやり取りを千絵にやらせていることが男らしくないようで許せなかったのだ。おそらく宮本が何をしても何をしなくても私は彼を気に入ることはない。
「郁子さんはお仕事は何を」
いきなり身上調査かとまた私の心に波が起こる。初対面なのに苗字ではなく名前で呼ばれたのも馴れ馴れしいようで癪にさわった。
「ほら、あの駅前の信用金庫よ。修ちゃんも知ってるでしょ？」
千絵が代わりに説明してくれるのも嬉しくはなかった。私の情報を勝手に宮本に流さないでもらいたい。
「ああ、何となく分かる気がする」
「何となくだなんて郁子に失礼よ、修ちゃん」
「そっかぁ」
私は甚だ沈鬱な気分になってきていた。もちろん宮本が信用金庫の存在をあやふやにしか覚えていないからではない。千絵がこの何

の取り柄もないような男に媚びているとも見えるほど親密に振舞っていることが悲しくてしかたがなかったのだ。
「失礼のお詫びに今度口座を開きに行きますよ。大した額はできませんけど」
「ありがとうございます。お待ちしています」
こんな男に礼を言うぐらいなら預金などしてもらわなくても結構だというのが正直な気持ちだった。千絵が招いた客だから我慢をして相手をするが、そうでなければ私は席に腰を下ろすこともなかったはずだ。
運ばれてきたのは赤ワインと三種類のパスタだった。ボンゴレ、イカ墨、カルボナーラのパスタはそれぞれ皿というよりも鉢と言った方が正しいような大きな器に盛られていて大人三人でも食べきれるかどうか不安になるぐらいだった。
ここのは本当においしいのよ、と千絵が率先して小皿に盛り分けてくれる。妙に甲斐甲斐しい千絵を見ていると百絵の言ったこともまんざらではないように思えてきた。当たり前のような顔で千絵の働き振りを眺めている宮本はもう亭主気取りになっているようにも映る。先日私の前で怒って見せたのは幼馴染である私に婚約者の存在を黙っていたことに対する後ろめたさからなのかもしれないという気さえしてくる。だとすると今日の食事会は快気祝いなどではなく千絵が私に宮本を紹介する場ということも言える。一ヶ月もしたら突然披露宴の案内が届いて泡を食うことも十分ありえる話だ。
しかし、そうでないとすれば。
思い当たるのは圭介のことしかない。圭介の口から私と付き合っていると聞けば千絵としてはおもしろくはなかっただろう。だからこそここでは私に当てつけるように宮本と睦まじくしてみせるのかもしれない。千絵は私に嫉妬しているのだろうか。
高校三年生のときに同級生だった圭介と付き合いたいと思っていたのは私ではなく千絵だった。千絵はそういう恋心を周囲に相談する性格ではないが、圭介を見るときの熱っぽい視線や圭介に話しか

けるときの上気した頬を見れば彼女の心内は長年一緒に居る私には手に取るように分かった。このままいけばいずれ千絵は圭介に告白するだろう。そして校内のマドンナとも言える千絵に好きと告げられて断る男などいるはずがない。

私はどうしてもそれを阻止したかった。そのときの私の心理が、千絵が誰かの女に成り下がるのが嫌だったのか、それとも周囲の憧れの的である千絵が欲するものを千絵に先立って自分の手にしたかったのかは分からない。おそらく両方だったのだろう。

私はすぐさま圭介に近づいた。何度か千絵に隠れて圭介を誘い出し、自分でも驚くほど巧みにさりげなく好意をほのめかし、頃合を見計らって強引に迫り身体を押し付けた。当時性の面ではまだ子供だった圭介は急な展開に慌てた様子だったが、私がその手を取って乳房に宛がえば逆らうこともできずにそのまま私に溺れてくれた。私にとっても初めての経験だったが怖さはなかった。それよりも千絵がまさに選ぼうとしていた男を奪うことができたことに心酔していた。

その後まもなく私は圭介には彼女がいるということをそれとなく千絵に伝えた。千絵は平静を装ってはいたが明らかに落胆していて、それを見た私は心の中で狂喜していた。しかし千絵は強かった。人の良い千絵が誰かから男を奪おうとするはずがないという私の読みが当たり、それ以後千絵はきっぱりと圭介に話しかけることも惚けたような視線を送ることもしなくなった。

私と圭介の付き合いはそこから始まっている。きっかけは千絵だった。私が圭介のことを好きだったわけではない。そして未だに圭介に対して私の中に恋愛感情は芽生えていないように思う。圭介が他の女の話題を口にしても嫉妬という感情を味わったことなど一度もなければ、圭介の傍にいて彼の存在に心がときめいた覚えもない。圭介から連絡がなくて寂しいと思ったこともないし、圭介のために自分の欲望を我慢したこともない。それでも圭介との関係が終わらないのは彼の存在があのときの喜びを思い出させてくれるからだろ

う。圭介に愛撫されているとき今でも私の身体には千絵に勝ったという高揚感が漲りそれが無尽蔵に溢れる愛液となって圭介の性器を潤すことを私は知っている。

当時千絵は私と圭介の関係には気付いていなかったと思う。大学受験を目前に控えていた私と圭介は外で会うことも少なかったが、それでもたまに会うときには私は誰にも見られないように細心の注意を払って行動したし、まもなく卒業して私はこの街を出たので二人でいるところを千絵に見られたはずはない。それに人が良すぎる千絵は私のことを疑ったりすることなど一度もなかっただろう。

快感の裏側に罪の意識を認めていないわけではない。だから時効として十分すぎるほどの年月が経っても千絵に圭介と付き合っているのかと尋ねられたとき私は暫く何も言えなかった。しかし心はもう開き直っている。圭介が何をどこまでしゃべったかは知らないが、事件は何年も昔のことだ。その気になったら幾らでもごまかすことはできるし、いざとなったら千絵が圭介のことを好きだったなんて知らなかったと言い張れば良い。竹を割ったようなさっぱりしたところがある千絵がねちねち嫌味を口にすることもないだろう。ただ千絵としては面白くないというのも分かる。だから今日は私を呼びつけて見せつけようとしているのかもしれない。それだけのことだ。そう思うと私は向かいの二人の仲をあれこれ訊くことも馬鹿馬鹿しく、食べることだけに専念することにした。

これで料理が不味かったらまさに泣きっ面に蜂だったが、千絵が言ったとおりパスタの味は素晴らしいものだった。イタリアンを嫌う女性は少なく私もパスタは日頃よく食べる方だが、これほどの味は都心でもなかなかお目にかかれない。魚介類は新鮮だし、ガーリックやチーズをふんだんに使っているので味わいに深みがある。ワインも渋みが少なく飲みやすい。

アサリがどうの、ベーコンがどうのと楽しそうにぺちゃくちゃやっている二人を尻目に私は黙々とフォークを操った。息がニンニク臭くなるのは間違いなさそうだし、イカ墨で口の中が黒くなりそう

だったが私は気にしなかった。宮本にどう思われようが知ったことではない。それよりもさっさと平らげてしまって二人を置いてお先に失礼といきたかった。そうだ。せっかくここまで来たのだから地下でケーキを買って帰ろう。ある同僚があそこのケーキは品が良くて美味しいと言っていたのを聞いて前々から食べてみたかったのだ。

「美味しかったでしょ」

私がものすごいスピードで食べ終えたことに満足したのか千絵が嬉しそうに尋ねてくる。

「ええ、とっても。でも久しぶりにワインを飲んだからかしら、さっきから少し気分が悪いの」

「それはよくないな。郁子さんは病み上がりなんだし」

途端に宮本が顔を曇らせて私の顔を覗き込んでくる。眉間に皺を寄せてみたところで全然締まらない顔だ。これ以上面と向かっていると本当に気分が悪くなってしまいそうだ。

「ええ。明日も仕事ですからぶり返さないといいんですけど。私、お先に失礼してよろしいでしょうか？」

「どうぞ、どうぞ。早めに休んで大事になさってください」

せっかくお呼びいただいたのに申し訳ありません、と頭を下げ財布を開こうとすると宮本は大きな手振りでそれを制した。二、三度の芝居じみた応酬の末、私は一銭も支払わずに一人で店を出ることに成功していた。

目当ての洋菓子屋を見つけたときには私の心は幾分晴れていた。宮本はもう一度会いたいと思うような男ではなかったが、美味しそうなケーキを目の前にしてみるとすでにどんな顔だったかも思い出せないほど印象が薄かった。ろくすっぽ言葉も交わしていないから彼のことを記憶から探り出す糸口も見当たらない。害にもならない出会いだったと脳内のハードディスクから削除してしまうつもりで郁子は両親の分も含めてケーキを購入した。もし今日の日記を書くとしたら、本当にあそこのケーキはおいしかった、両親も喜んでくれて嬉しかった、で終わりとなるだろう。ベッドに入り目を閉じた

ときに浮かんでくるのは宮本の顔ではなく三角形のレアチーズケーキであり、品の良い甘さを反芻しながら私は今日一日に何の不満もなく眠りにつくに違いない。私は千絵と宮本に出くわすかもしれないという危険を何一つ顧みず、ケーキの入った箱を水平に保つことだけに専念してゆっくりゆっくり駅のホームへと足を運んだ。

11

「吉野さんですよね」
カウンターを挟んで正面に立っているその男に名前を呼ばれても私はピンと来なかった。グレーのセーターにベージュのチノパンというスーパーのチラシでしか見たことのないような格好。私の名前を知っているということは、どこかで会っているのだろう。しかしそれがどこだったかが思い出せない。小太り気味のたるんだ身体に広がり始めている額、今時珍しい黒ぶち眼鏡。そう言えば最近こんな感じの、印象の薄い冴えない男に出会った気がする・・・。そこまで考えて私は漸く一人の男に思い当たった。
「宮本さん！」
宮本は嬉しそうに頷いた。
「よかったぁ。忘れられちゃったのかと思ったよ」
宮本はほっとしたような表情でお尻のポケットからハンカチを出し、うっすら汗が浮かんでいる額を押さえた。
「そんな、忘れるはずがないじゃないですか。ハハハハハ」愛想笑いをして見せたが先が続かない。「えーっと、今日はどういう御用でした？」
「どういうって、またまたぁ、この前会ったときに約束したじゃない」
約束？何のことだろうと私は心の中で小首を捻った。快気祝いと称して呼び出されたレストランで私はこの男とほとんど言葉を交わしていない。顔は思い出すのに苦労したが、そのことは鮮明に覚えている。あのとき私は半ば意固地になって彼に対して口を閉ざしていた。話を振られても相槌すら打たないこともあった。そんな状況で約束など交わすはずはなく、仮に何かを結んでいたならば覚えていないはずがない。
「お約束どおり口座を作りに来たんですよ。わざわざ仕事を休んで」

私はそんなようなことをこの男が言っていたことを思い出した。確かに宮本は口座を開きにくると言い、私は形式的に礼を述べた。しかしあれは挨拶のようなものだ。あの社交辞令を持ち出して約束だなどと恩着せがましく言われては甚だ不愉快だった。

「それは申し訳ありません。わざわざありがとうございます」

私は窓口係の習性に従って反射的に謝っていた。我が社のためには取るに足らない口約束を律儀に守ってくれた善意の客に礼を言ってしかるべきなのだ。個人的な感情で、そんなこと頼んだ覚えはないなどと開き直ることは許されないということぐらい私も社会人の常識としてわきまえている。

「仕事休まないと窓口やってる時間に来れないもんね」

この男は嫌味を言いにわざわざ来たのだろうか。

毎日窓口に座っているとこういう性質の悪い客に遭遇することもしばしばだ。何か文句を言ってやろう、どこかに落ち度はないか探してやろうという意気込みで目をギラギラ光らせてやってくる輩もいる。そんな客に対して運悪く何かミスをしでかしてしまったらもう最悪だ。その客からはみんなの前で口汚く罵られるし、それが終わったら上司に呼び出されて説教を受けなくてはいけない。そのときは事故みたいなものだと諦めるしかないのだが私にはなかなか割り切れないことが多い。二、三日嫌な気分を引きずってしまうこともよくある。今回は名指しだ。絶対にミスはできないと私は気合を入れた。

「弊社ではインターネットでのサービスも充実した内容のものをご提供させていただいておりますので、そちらをお好きな時間にご利用いただくと大変便利ですよ」

気がつくと隣の同僚は「営業時間は終了しました」のプレートを窓口に置いて後ろの席に退く準備をしている。壁の時計に目をやると丁度営業終了時刻の惨事だった。いつの間にか宮本以外に客はいなくなっていた。

「へぇ、そうなんだ。世の中便利になるもんだね。でも俺、機械が

苦手でパソコンの使い方良く知らないんだ」
　へへっと宮本は照れたように無様に顔を歪めて笑った。今時インターネットもできないような社会人がいるだろうか。いや、こんな男にあれこれ説明しようとしていた自分が愚かだったのだ。玄関の方から同僚の男性職員が催促するような目でこちらを見ている。宮本が帰れば今日の受付業務は終了となってシャッターを閉じることになる。ここで時間を費やしていてはこちらが終わるのを待っている彼にとっても迷惑だ。
「口座の開設でございましたね。それではこちらの用紙にご記入願います」
　宮本に任せていてはきっと無駄に時間がかかるし記入ミスをするだろう。私は鉛筆を片手に順序良く記入を促した。はい、そこにお名前を。苗字と名前の間は一マス空けて。こちらに郵便番号とご住所です。県名からお願いします。次にお電話番号です。携帯電話でもかまいません。
「はい。これで全て記入できました。今日は身分証明書は何かお持ちですか？」
「身分証明？」
「はい。お客様を宮本様と特定できる公の機関が発行した証明書です。自動車の免許証で結構ですよ」
「ごめん。俺、自動車の免許持ってないんだ。気をつけて印鑑だけは持ってきたんだけど・・・困ったな」
　照れ隠しの笑顔を引きつらせて宮本はどこのブランドだか分からない悪趣味な蝦色のセカンドバッグの中をごそごそやっている。まったく、冴えない男だ。今時三十男が自動車の一つも運転できないなんて愚の骨頂だ。笑い話にもならない。嫌でもため息が出てしまいそうだ。私はこの男が女とデートをしているところを想像した。買い物にも、映画にも、ホテルにも彼女の運転で・・・。宮本を助手席にラブホテルの駐車場に車庫入れする自分を想像してみる。耐えられないと私は思った。こんな頼りのない男とのセックスなど盛

り上がるはずがない。やはり千絵と宮本が付き合っているなどありえないことなのだ。
「パスポートや健康保険証でも構いませんが、お持ちでしょうか？」
私は受付マニュアルに従って、期待せずに声を掛けた。おそらく今日のところは出直しということで落ち着くだろう。何のために受付時間を延長させてまでこの男に付き合ったのだろうか。自動ドアの前から先ほどの職員が相変わらずこちらをちらちらと見ている。彼もいい加減うんざりしているだろう。
「それなら、あるよ」
早く言えよと言わんばかりに宮本は二つ返事で健康保険証を取り出した。私は暫く呆気に取られた。宮本は常に健康保険証をセカンドバッグに入れて持ち歩いているようだ。この年代で身分証明用として健康保険証を常に携帯している人間に私は出会ったことがない。身分証明書と訊かれてピンと来なかったのだから宮本も自己を証明するために保険証を持っているわけではないのだろう。彼の顔の艶は病弱とは程遠い。では何のために・・・。意味もなく健康保険証を携行する男。個人的な好みの問題だが・・・。本当に本当に冴えない。冴えなさ具合が私の目論見を越えていて私はまたさらに失望していた。
「これでいいんだよね？」
不安そうに宮本が私の顔を覗き込んでくる。
「あっ、はい、印鑑もお持ちですし、これで大丈夫です。すぐに新しい通帳を発行させていただきます」
「よかった。口座を開くって結構難しいもんだね」
それはマネーロンダリングを狙っているような犯罪者や首の回らなくなった多重債務者の発想だ。一般市民が口座を開くのが難しいなどという感想を聞いたことがない。
「つきましては、宮本様。まず最初にいくらか預金していただくことになりますが」
一円でも構いませんが、と私が言おうとするのを宮本が大きな声

で遮った。
「三百万で」
宮本はバッグから福沢諭吉の束を無造作に鷲掴みして私の前に積み上げた。
「ところでさ、郁子ちゃんはどうする？俺、何したらいいか分かんないんだよね」

12

私はため息をつきながら待ち合わせ場所にした駅前のドーナツ屋に向かっていた。
どうしてこんなことになってしまったのだろう。これから私は宮本と落ち合って彼の買い物に付き合う破目になってしまった。宮本がどうすると訊いてきたのは一週間後に迫っている千絵の誕生日のプレゼントのことだった。
「何にしよっかなぁ。女の子へのプレゼントって何買っていいかさっぱりわからないんだよね。郁子ちゃん一緒についてきてくれない？」
宮本は静かな行内で私に向かって大声で相談を始めた。私の背中に同僚たちの好奇の目が集中しているのはわざわざ振り返らなくても分かる。玄関を閉めたい職員は露骨に不機嫌そうな表情を浮かべている。私個人にとっては何の益にもならないが三百万という大金を気前よく預金してくれた客を無碍に扱うわけにもいかない。しかも相手は知らない人間ではないのだ。私は羞恥心で顔から火が出るような思いでドーナツ屋を指定したのだった。
「言っちゃあ悪いけど、あんな男の誘いに乗っちゃうんだね。やっぱり世の中金なのかぁ」
俺ももっと強引に誘えばいいのかなぁ。終業時刻が過ぎて廊下ですれ違った際に杉田が悲しそうな顔でボソッと呟いた。杉田があんな不恰好な誘いをしてきても私は絶対に乗らない。杉田はもっとスマートであってほしい。だが、結果として杉田のプライドが傷ついているのは私にも理解できた。
「じゃあ、今度ごはんをご馳走してください」
あからさまな社交辞令だが杉田はそれでも幾分機嫌を直したようだった。どうして私がこんなに気を使わなくてはいけないのか。着替えに向かいながら私は困った男たちだと盛大なため息を漏らした。

ドーナツ屋に足を踏み入れた瞬間に店の奥の方から大きな声で、「郁子ちゃんこっちこっち」と私を呼ぶ声がする。店内の客と店員が一斉に私の方に視線を投げかけてくる。私と宮本を見比べてくすくす笑っているカップルがいる。消えてしまいたい。私は思わず間違えましたと頭を下げて外に出たくなるのを何とかこらえ、肩をすぼめ足音を忍ばせて宮本の席に向かった。空いている椅子にコートを掛け、向かい合うように私が座ると宮本は満足そうに頷き店員に向かって手を挙げ大声でコーヒーのおかわりを要求した。

「ここのドーナツ屋ってコーヒーのおかわり無料なんだよ。知ってた？これで5杯目」

なみなみ注いでよ、と要求する近江商人顔負けの宮本を見ているとどうしようもなく胸がむかむかしてくる。胃を壊して下痢にでもなってしまえ、といらいらしているとこちらの胃が荒れてしまいかねない。「お客様は何かご注文は」と愛想の良い高校生ぐらいの店員に尋ねられ、私は小さく、「すぐに出ますから」と断ったが宮本のコーヒーのおかげで全く信憑性がない。

私は早く店を出たかった。宮本と向かい合って座っているのも苦痛だが、それ以上に宮本と一緒にいるところを誰かに見られはしないかと気が気でない。こんなに職場に近いところに長居していてはどうぞ見てください、悪い噂を流してくださいと言っているようなものだ。あの三百万も色仕掛けだったのかと邪推されようものならあまりの口惜しさに気が触れてしまいそうだ。

「キーケースにしようかと思ってます」

先日の母校訪問の際に知ったのだが千絵は車が好きなようだ。運転していると嫌なことを忘れると言っていたし、休日などの暇なときにはよく洗車をしているようだ。私は車のことは良く分からないが、ハンドルもホイールもカーステレオも純正ではなく、それぞれ値が張るものらしい。私の周りでミッションを操る女性など千絵以外にいない。そんな千絵の車の鍵にはどこかの温泉地の土産物のようなみすぼらしい熊のキーホルダーがぶら下がっていて私にはどう

も違和感があった。
「キーケースねぇ」
ふーん、と宮本は面白くなさそうに呟いた。
「今、千絵ちゃんがつけてるキーホルダーって俺が買ってきた土産物なんだよな」
「そうなんですか」
そう言われても引き下がる気など全く起こらなかった。それどころか余計にセンスの良いキーケースを見つけて取り替えさせてやるという気概に私は満ち溢れてきた。
「ほんと、女の子って何が欲しいのか分かんないよな」
「そんなことないですよ。女の子なんて単純です。誰だって財布や鞄なんかをあげておけば満足しますよ」
「へぇ。郁子ちゃんも財布や鞄が欲しいの？」
宮本の眼鏡の奥に潜んでいる愚鈍そうな目が私に粘っこい視線を送ってくる。身の毛がよだつとはこのことだった。私は思わず悲鳴を上げそうになるほど背筋が凍りつくのを感じた。
もうこれ以上宮本の顔を直視できない。宮本と同じ空気を吸っていることに耐えられなくなっていた。
私はそろそろとコートの方に手を伸ばし、いつでも立ち上がれるように準備をした。そもそも私が宮本の買い物に付き合わなければならない必要性などどこにもないのだ。ごめんなさい、用事を思い出しちゃって。これだけのことを言い残して素早く出口に向かえば良いのだ。明らかに嘘と分かってもかまわない。私は宮本に気付かれないように深く息を吸い込んで呼吸を整えた。
「郁子ちゃんって千絵ちゃんに似てるよね」
「えっ？」
「千絵ちゃんも結構背が高いけど郁子ちゃんも同じぐらいでしょ。髪形も体型もよく似てるし。何となく全体的に雰囲気がそっくりなんだよね。それはきっと性格も共通するところが多いからなんだろうな。だからさ、郁子ちゃんなら千絵ちゃんがもらって喜ぶものが

分かるんじゃないかと思って相談しに来たんだよ」
「そうだったんですか」
私は伸ばした手を膝の上に戻した。
宮本も可愛いところがあるではないか。私と千絵が似ている。二十五歳になった今でもそう言われると全身が一つの羽になったように軽い気分になれる。
「訊いても良いですか？」
「何？」
「宮本さんって千絵と付き合ってるんですか？」
ぶっ。私の質問に宮本は口にしたコーヒーを戻しそうになっていた。私は思わず自分のハンカチを差し出していた。宮本は私の申し出に掌を見せることで礼と断りを表しジーンズのポケットから紺色のハンカチを出して口に当てた。
「付き合ってはないと思うよ。親同士が知り合いだったから昔からお互いに知ってて、幼馴染みたいなもんかな」
口を拭ったハンカチで宮本はついでのように眼鏡のレンズを拭き始めた。黒ぶちの眼鏡を外した宮本は余計にインパクトが薄くなって地味な顔つきだったが意外に目元が鋭く精悍さがあるように見えた。
「宮本さんは、千絵のこと、好きなんですか？」
宮本は手を止め私の方に一瞥を投げかけたかと思うとハンカチをしまい眼鏡を掛け直してまたコーヒーを口にした。
「正直言って、好きだよ。結婚したい。だからこそ今回のプレゼントは大事なんだ。僕は千絵ちゃんにプロポーズするつもりなんだ」
「分かりました。私に任せてください。きっと千絵が気に入るものを見つけてみせますよ」
さあ、行きましょ、と私は率先して席を立った。まだコーヒーが残っている、と未練たっぷりにカップを眺める宮本を置き去りにして私はドアに向かった。宮本が慌てて立ち上がり椅子を蹴飛ばす音が背後で聞こえるが私は足取りを緩めることをしなかった。

13

千絵の誕生日である今日、私は急遽圭介に電話して会いたいと告げた。足腰を使う仕事から帰ったばかりで疲れているだろうが圭介は私からの突然の電話を珍しがり二つ返事で了解してくれた。彼はまもなく車で迎えに来てくれるはずだ。私は今日どうしても圭介に抱かれたかった。

例の駅ビルで購入したブランド物のキーケースは千絵には後日渡すつもりだった。もちろん千絵からは宮本さんと三人で食事をしようと誘われている。しかし私は千絵の申し出を、月末で残業しなくちゃいけないからと断った。月末が近づいてきて忙しいのは嘘ではないが、仕事に慣れてきた最近ではそれほど遅くまで残らなくても片付けることができるようになってきたし、他の日に回そうと思えば回せないこともなかった。実際、明日やればいいと今日は定時にあがっている。では何故千絵の誘いを蹴ったのか。それはいろんな意味で私がいれば宮本がやりづらいだろうと思ったからだ。

一週間前私は宮本を駅ビル内のジュエリーショップに連れ回した。千絵に告白する、しかもプロポーズまで考えているとなれば指輪以外に贈るものなどない。私の提案に宮本も納得したようだった。

「指輪なんかあげたら重い感じがして迷惑かなって思ってたけど、言われてみれば確かにそれ以外にないよな」

そう言ってショーケースの中を、ああでもないこうでもないと見つめる宮本の趣味は最悪だった。馬鹿でかい石、嫌味に光るゴールド、過度に手を加えすぎたデザイン。宮本が選ぶものはどれもこれも品のないものばかりだった。千絵にはもっとシンプルなものが似合うということが分かっていない。大きすぎないダイヤに瀟洒なデザイン。私が自信を持って宮本に勧めたのは私の指に一番似合うと思ったものだった。

今頃宮本は私が選んだ指輪をポケットに忍ばせて千絵とどこかの

レストランで食事をしているのだろう。私の身体を愛撫したときと同様の覚束なさで指輪を弄んでいるかもしれない。そう思うと早く圭介の腕の中に収まりたいという気持ちが強くなる。何故かは分からないが圭介以外の男と時を過ごした後、私はいつも圭介の身体を欲してしまうのだ。そこが私にとって最も居心地が良いということかもしれない。

宮本の告白の行方も気になるがそれ以上に大事なことがある。「千絵のことが好きだ、結婚したい」とまで言い切った男をいとも簡単に落としたことに大きな意味があるのだ。しかも私からは何も言ってはいない。ちょっとした仕草を見せただけで宮本は金魚のように口をパクパクさせながら私に迫ってきた。もう少し骨があるところを見せるかと思ったが、あまりの呆気なさに逆に物足りないほどだった。

遅過ぎず早過ぎず、私の期待通りの時間で圭介は私の前に現れた。

「ホテル行こ」

助手席に座った私の最初の一言に圭介はちょっと驚いたような横顔を見せたがすぐにいつもの微かに笑っているような柔和な表情になってレバーをドライブに移した。

「よし」

ミラーと目視で周囲を確認してからゆっくりと私たちの軽自動車が走り出す。

ああ、と私は心の中で嘆息する。この声。この仕草。圭介が見せる全ての動作が私を平穏な気持ちにさせてくれる。

私は宮本と寝て良かったと思った。宮本との関係などこれからの私には何の意味もないが、圭介との関係を幸せだと思えるこの瞬間がたまらなく愛しい。

私たちは真っ直ぐにホテルに向かっている。圭介が私の中で己を解放するために、私が圭介に対して己をさらけ出すために。私は下腹部が潤んでくるのを感じないわけにはいかない。

「その指輪似合うね」

私の左手の中指には新しい指輪が輝いている。さすが圭介は良い目をしていると私は思った。宮本とは月とすっぽんだ。
「でしょ。圭介が買ってくれないから自分で買ったのよ」
嘘だった。しかしびっくりするぐらい自然にその言葉は私の口をするりと出ていった。そして私は、ある意味自分で買ったのだと納得するのだった。この指輪の代価を私は身体で支払ったのだと。あのとき宮本は血走った眼で首を縦に振った。同じ指輪を二つ購入するという人でなしの行為を彼は恥も知らずにやってのけた。もしかすると同じ指輪を千絵は喜んで受け取っているかもしれない。そう思うとさらに私の性器は圭介を欲しがって濡れてくる。
「言ってくれれば買うのにさ」
「女の口から言わせるなんて大人の男のすることじゃないわよ」
「そう言われるとつらいな」
私たちは同じように吹き出して笑った。
部屋に入ると私は圭介を押し倒すようにしてその身体の上に馬乗りになった。圭介の唇を求め粘りつくように舌を絡ませながらいつもの感覚で彼の衣類をはだけさせていった。ズボンのファスナーを下ろし雄々しく聳える肉棒を露わにすると私は薬物中毒者が麻薬を求めるように理性を失ってそれにむしゃぶりついた。唾液でしっかりと潤いを与えると私はもう我慢ができずに圭介の腰に自分の腰を下ろしていった。圭介が私の中に肉を掻き分けるようにして入ってくる。私は太い杭で背筋を貫かれたような感覚に思わず声を上げていた。次々に押し寄せてくる快感が私の四肢の力を奪っていく。私が力尽きようとしたときに圭介は芸術的なタイミングで身体を入れ換え、私の上に重なるようにしてさらに私に快楽と興奮を注入していく。私は非常に満足していた。まさに至福のときだった。
全てが終わりまどろみの中で私はぼんやりとした苛立ちを抱いていることに気付いた。気だるく麻痺した思考回路ではこの心に刺さっている棘のありかを探ってもなかなか辿りつけない。このちくっとしたさりげない痛みは何なのだろう。圭介に存分に抱かれた今、

これ以上私は何を求めているのだろう。
うつ伏せに枕に埋めていた顔を少し浮かせて私は圭介の様子を覗き見た。
圭介はちゃんと私の傍らにいた。眠ってはいないのだろうが穏やかに目を閉じて横になっている。それを確認すると私のどこかに存在する小さな傷口が余計にじんじんと痛み出した。
この距離。私は半月ほど前にもこの近さで誰かと顔を見合わせている。私は圭介の横顔に千絵の顔を見た。そうだ。あのとき千絵は私に圭介と付き合っているのかと尋ねた。圭介の口から直接聞いたと言っていた。しかし私は圭介から千絵に会ったことを聞いてはいない。どうして言わないのだろう。忘れているだけなのだろうか。それとも圭介にとっては千絵と会ったことなど大したことではないのだろうか。
千絵と圭介も古い付き合いだ。私と千絵が親友だということも知っている。その千絵と街でばったり会ったのなら、やっぱり私に報告するべきではないだろうか。大体、ばったり会っていきなり誰と付き合っているのかなどという会話になどなるものだろうか。だとすると千絵と圭介は立ち話もなんだからと喫茶店ぐらいには寄ったかもしれない。時間帯によれば喫茶店がレストランにもなりさらにアルコールが入る可能性もある。圭介も千絵も酒癖が悪いというわけではない。しかし圭介も千絵のような美人と二人きりで飲み交わしていれば悪い気はしないだろうし、少なくとも以前は恋をしていた相手と再会したのだから千絵としても気分が高揚するだろう。
私は圭介の横顔を見つめながら空想を重ねていった。マイナス思考にはなかなか歯止めがかからない。
「郁子」
不意に名前を呼ばれて私は慌てて顔を伏せた。いつの間にか気だるさはどこかに吹き飛んで私の心臓は活発に動き出している。
「何？」
私は努めて声に物憂い響きをもたせようと試みたがうまくいった

だろうか。
横で圭介が上体を起こしたのが分かる。私は裸の背中に圭介の射るような視線を感じる。私は何気ない会話が始まることを望んだ。世間話のようなおしゃべりの中から千絵の話にもっていこう。そうすれば自然と圭介も千絵と会ったときのいきさつを教えてくれるだろう。狭い町だ。歩いていれば過去の同級生に遭遇することなど珍しい話でもない。きっとたわいもないことなのだ。そうだ。そうに違いない。
「俺と結婚してくれないか」
結婚？私が？圭介と？私は完全に意表を突かれていた。まさかこのタイミングでプロポーズをされるとは思ってもみなかった。私は枕に埋めた顔を上げることができないでいた。寝たふりを決め込んで聞かなかったことにしてしまいたいぐらいだった。
「突然どうしたの？」
私は顔だけを圭介の方に向け言葉の調子に軽い驚きを表現した。面白い冗談ねという意味の微笑さえ浮かべてみせた。こんなシリアスな場面は苦手なのだ。何とかして圭介に笑ってもらいたい。笑って悪い冗談だったと謝って欲しい。お願い。そんな怖い顔は圭介には似合わない。
「冗談でも何でもないんだ」その言葉の重量感が私の退路を消していく。圭介の真剣な顔つきが私をじりじりと追い詰めてくる。「思いつきでもない。郁子がこっちに帰ってきてくれて実際の距離が縮まったら、心の距離も縮まった気がするんだ。最近本当に郁子のことが好きなんだなって実感できる。俺には郁子しかいないんだよ」
「でも、そんな、いきなり結婚だなんて」
私は結婚など考えたこともない。そんな儀式は遠い国のおとぎ話程度にしか認識していない。結婚どころか私は圭介のことを愛しているかどうかさえもあやしいのだ。
「いきなりってわけでもないだろ。俺たちもう七年も付き合ってる。年齢だっていつ結婚してもおかしくない。よく考えて出した結論な

んだ」
「それはそうだけど。・・・でも、やっていけるのかしら」
「心配ないよ。周りの奴らは一年でさえもなかなかもたないのに、七年間も付き合ってこれたっていうのは俺たちの相性がいいってことだろ？収入だって共働きなら問題ないよ」
　私は返す言葉に詰まった。圭介は勘違いをしている。私たちが七年間付き合ってこれたのはお互いがお互いに干渉しなかったからだ。月に一度だけの身体の関係を保ってきたからなのだ。言えることはセックスについての相性が良いというぐらいのことだ。
「嫌なのか？」
「そ、そんなことないけど」
「じゃあ、いいんだな」
「ちょっと、ちょっと待ってよ。どうしてそんなに急いで結論を出そうとするの？そうよ、圭介はよく考えたかもしれないけど、私は今まで結婚なんて考えたこともなかったのよ。圭介が考えたように私にも考える時間が必要だわ。一生のことだもの。後悔しないようによく考えて答えを出したい。少し時間が欲しいの」
「わかったよ」
　圭介は渋々私の申し出を承知した。しかし私の「結婚なんて考えたこともない」という言葉にショックを受けたらしく「寂しいなぁ」と大きな独り言を何度も口にした。私はいつまで経っても落ち着かない心を持て余してシャワーに向かった。いつもは全裸でも平気なのに今日はシーツを身体に巻きつけてベッドから降りた。何の前触れもなくプロポーズをしてきた圭介という人間が何を考えているのか分からなくなってしまっていた。

14

圭介にプロポーズされた翌日に私は宮本とベッドを共にしていた。宮本に抱かれることに大して抵抗を感じなかった自分がさすがに空恐ろしい気がした。普通なら圭介に悪いと罪悪感を抱くところだろう。そもそも複数の男と関係を持っていること自体が世間的にタブーなのかもしれない。しかし宮本の千絵にした告白の顛末をまだ聞いていなかった私は宮本に夕食に誘われたときには二つ返事で了承していた。

食事をし、ワインを飲めば饒舌になって自分から話し出すだろうと私は高を括っていたが意外に宮本の口は重かった。仕方なく私は宮本とホテルに行きセックスをした。物足りなくてじれるぐらいの淡白なセックスの後、宮本は急に口を開きだした。結局私とセックスがしたかっただけなのだ。結婚したいと別の女を口説いておきながらその一方で他の女を抱かずにはいられない。男とはなんて身勝手な生き物なのだろう。

「見事に振られちゃったよ」

「あら。じゃあ指輪は？」

「そういう意味のプレゼントならもらえないって返されちゃった」

私はいつものうつ伏せの姿勢から枕の向こうに左手を伸ばした。中指に咲いているダイヤモンドが急に光を失ったように見えた。高価な品物だが千絵が受け取らなかったのでは意味がない。

「理由は？男として見てもらえなかったってこと？」

「郁子ちゃんは厳しいねぇ。千絵ちゃんはそんなにストレートに言う娘じゃないよ」

宮本は苦笑して言った。

言葉が直截的でなくてもつまりは同じことなのだろう。私はもう二度とこの男に身体を許すことはするまい。

「他に付き合っている人がいるんだってさ」

私の左胸で何かが大きく跳ね上がった。またか、と思った婚約者騒ぎである程度免疫ができていたとは言え千絵には苦しめられっぱなしだ。
「へー。知らなかった。千絵にも彼氏がいたんだ。でもまあ当然よね。あんなにかわいいんだもん。で、それが誰なのか訊かなかったの？」
「もちろん訊いたさ。俺だって一世一代のプロポーズをしてるんだからそれを訊かなきゃ諦めきれないってもんだよ」
直前に他の女を抱いておいて一世一代もあったものではない。何とも都合の良い話だ。しかし私には茶化す余裕はなかった。ここが重要だ。千絵が付き合っている男。それが誰なのか知らないままではこの男に抱かれた意味がない。私は胸のざわめきを顔に出すまいと必死に平静を装った。何かを口にしようとすると言葉が震えそうで怖かった。
「意外と郁子ちゃんの知ってる人かもよ」
「えっ？誰？誰？私も知ってるなら高校とかの同級生かな」
「さあ。それは分からないんだ」
「分からないってどういうことよ。訊いたんでしょ？まさか誰なのか知るのが怖くて訊かずに帰ってきたんじゃないでしょうね」
私は乳房がはだけるのも厭わずに宮本の白く滑らかでぶよぶよとした肩にすがりついていた。負け犬のいやらしい視線を胸に感じるまで私は我を失っていた。
「訊いたさ。でも教えてくれなかったんだよ」
私が毛布を引き寄せて胸を覆うのを宮本は物欲しそうに見つめていた。
「彼氏がいるだなんて俺と結婚したくないための嘘なんじゃないのか、って問い詰めたんだ。しつこく訊いたらようやくため息つきながら、郁子も知ってる人よ、って。それだけ言い残してさよならされちゃったんだよ」
最後の最後まで冴えない男だ。心の底からがっかりした。千絵に

捨てられたときの様子はあまりに無残で想像するに堪えない。
「シャワー浴びるわ」
私は自分でも可愛げがないと思うほど慣れた手つきで枕もとのパネルを操作し部屋の灯りを消してベッドから滑り落ちた。浴室のドアを開けるときに胸の辺りで揺れているものに気付いて私はベッドに向かって声を掛けた。
「ねえ。千絵にネックレスをプレゼントしたことあった？」
「いや。ないよ」
私は完全に宮本に対して興味を失っていた。もう街ですれ違っても気付かないだろうと思うほど目の前の暗闇にその顔を思い浮かべることさえできなかった。私はシルバーのクロスを強く握りしめて浴室に足を踏み入れた。

15

私はむしゃくしゃしていた。出口の見えない閉塞感が常に私の胸を圧迫していた。

プロポーズされてから半月が過ぎたが私はまだ圭介に返事をしていなかった。それどころか私は圭介に会うことを避けるようになっていたし圭介からの電話にも出ようとしなかった。私は初めて圭介を疎ましいと思うようになっていた。一番身近な人間に究極の愛情表現をされて私の心は鉛を食べたように重かった。

千絵の彼氏の正体は杳として知れなかった。「私が知っている人間」という心許ない情報を頼りに小、中、高の重厚な卒業アルバムを引っ張り出してきてそれぞれを向こうが見えるほどじっくりと凝視したがそれだけでは当然何も分かりはしなかった。誰かに訊いてみようとしても適当な人間が見当たらない。もともと私は友達が多い方ではなく、千絵もまた私とばかり一緒にいたので二人に共通の友人というものも皆無だった。本来なら圭介に相談したいところだったがそれも今のタイミングは無理だ。

千絵が誰と付き合っているのかを知って私はどうしようというのだろうか。きっとその男の心を奪おうとするのだろう。私を拒もうとしても拒めないようにじりじりと私を押し付けていくだろう。追い詰めて追い詰めて最後には必ず私はその男の唇に唾液を絡ませた舌を無理やりに滑り込ませるだろう。男のごつごつとした手を取って無理やりにでも私の乳房に宛がうだろう。息を荒げ私は自分の腰を相手の腰に擦り付けるだろう。しかしその相手が誰なのかはっきりしない。姿形の見えない男を空想して自慰に耽るのは何とも空しいことだった。

私はむしゃくしゃしていた。どんよりとした心の空模様をすっきりさせたい。半分自棄になったような気持ちでその日私は杉田の誘いに乗ったのだった。

「美味しくなかった？」
「え？」
「いや、郁子ちゃんがあまりに浮かない顔してるからさ。そんな顔してるとここのシェフが自信なくしちゃうよ」
私は杉田の車で彼の友人が経営しているという洋食屋に連れて来られていた。フランスの田舎町を思わせるような木造の趣のある店内は若いカップルで満席に近かった。雰囲気だけではこれほどまで客は寄り付かない。当然味の方も納得できるものだった。
「美味しかったわよ。最初に出てきたミネストローネなんてとても味わい深かったわ。きっと手間暇掛けてるんでしょうね」
「シェフはスープが自慢なんだ。聞いたら喜ぶと思うよ。それにしても・・・」杉田が私の顔を覗き込んでくる。杉田は女を知っている余裕ある表情をしている。女を喜ばせる方法をいくつも引き出しに用意しているという自信が漲っている。誰かさんとは大違いだ。
「何かあった？彼氏と喧嘩した？まさか振られたとか？まあ、何があったにせよ、そのおかげでこうして食事を一緒にできたんだから僕はその何かに感謝してるけどね」
「何かがあったのは当たってるけど、その推測は大外れね。ああ、もうそんなことはどうでもいいわ。私、今日はワイングラスを優雅に傾けているような気分じゃない。それよりはジョッキのビールを一気に呷りたい心境なの。飲んで乱れて暴れたいの」
若い女がこんなことを言うと大抵の男は一瞬怯んだような目つきになる。そしてすぐに虚勢を張って私の意見に賛意を示すのだが、そんな臆病な雄には今日は用がない。私を縛り上げて服従させてくれるぐらいの強引な荒々しさを私は求めているのだ。
「こりゃ、とんだじゃじゃ馬だったかな」
杉田は呆れたように口元を緩めた。しかし目は笑っていない。かと言って臆したわけではない。それどころか好敵手に出会って喜んでいるかのように真っ直ぐ私を睨みつけている。
杉田は伝票に手を伸ばすとレジに向かった。慣れた手つきでカー

ドでの支払いを済ませ私を車へ誘った。外の冷えた空気に私は「寒い」と身震いしてコートの襟を掻き合わせた。しかし震えは収まらない。私はぞくぞくしていた。これから何が始まるのだろうか。私はこの車に乗って良いのだろうか。ここで助手席に座るということは全てを杉田に任せるということだ。私はドアに手を掛けたところで圭介を思い浮かべ逡巡した。私は圭介と結婚するのだろうか。それが幸せというものかもしれない。杉田は圭介や宮本や他の男たちとは違う気がする。ここで全てを許してしまえば私は自分を制御できなくなって後戻りできなくなってしまうかもしれない。

「乗れよ」

杉田の乾いた抑揚のない言葉が私に命令する。私はその響きに思わず声を漏らしそうになるほど鋭く感じた。

重厚なドアが意外なほど軽い力で開く。席に腰を下ろしドアを閉じると世界と隔離された音がした。私は今自分という存在が自分の手元から滑り落ちた気がした。

まもなく杉田が操る車は一片の迷いも見せずにホテルの駐車場に停まった。私は導かれるままにエントランスをくぐり、エレベーターに運ばれて、男のトレンチコートの背中を見ながら後ろ手に部屋のドアを閉じた。

私は覚悟を決めていた。今日一晩私は杉田に弄ばれよう。そして明日になったら圭介に電話をしよう。私でよかったら妻にしてほしいといじらしく答えよう。そして私は一生を掛けて圭介を愛する努力をしよう。私は今まで誰一人として愛したという自覚はない。従って愛というものがどういうものなのか分からない。だけど私なりにやってみるつもりだった。愛というものそのものは得られなくても、たとえままごとのようなものでも愛に近づけていこう。偽物であってもそれを疑わずに愛と信じよう。そのためにも私はここで狂いきるのだ。

部屋に入ると私はベッドの脇に立ち自らコートを脱ぎスーツの上着のボタンを外した。杉田はネクタイを緩めたワイシャツ姿で私の

眼前に現れ私のスーツの襟を持って私が背に負っている重荷を剥ぐように脱がせた。ソファにその上着を投げたかと思うと私を突き飛ばし、ベッドに仰向けに不時着した私の肢体に跨ってきた。

私は恥かしいぐらいに興奮していた。杉田の指が私のブラウスのボタンを一つ外す度に仰け反るほどの快感が全身を貫いていく。私は堪え切れずに杉田の首に抱きつき唇を重ね肌の感触を求めて頬に頬を摺り寄せた。伸び始めた髭のざらついた感触が何とも心地よい。

杉田は私の頬に、瞼に、鼻の頭に何度も口づけをし、下唇に、首筋に、耳たぶに歯を立てながらも巧みにボタンを弾いていった。次に上体を起こし裂けそうになるほど強引にブラウスを開く。

私は小さく悲鳴を上げていた。あまりの興奮に呼吸をすることさえ下手くそになっていた。私の胸が大きく上下に揺れる。私はその揺れを杉田の体重で押さえつけられることを目も開けられずに今か今かと待ち望んでいたのだが、一向に杉田はやってこなかった。

「このネックレス・・・」

杉田は確かにそう言った。そしてやがて私の上に覆いかぶさってきた。

私の脳は瞬時に冷静さを取り戻していた。淫らに声を荒げながらも杉田の、濡れた唇、手の動き、瞬きの回数、呼吸の速さ、その全てを隈なく分析し始めていた。

16

ドライヤーの騒音に紛れて最近聞きなれた声が私の名前を呼んだような気がした。
「何か言った？」
私はドライヤーを止め、まだ生乾きの髪を掻き揚げてベッドの方に問いかけた。
「携帯鳴ってる。正確に言うと震えてるみたいだよ」
「放っといて」
私は再びドライヤーを髪に向けた。こんなときに電話を掛けてくるなんて気が利かないなどと勝手なことを思いながら。
「でも、さっきから何度も掛かってきてるよ。急用なんじゃない？」
何よ、もう。私は正面の鏡に映る自分を見た。髪はぼさぼさだし、化粧は洗い流してしまったので眉毛も描いていない。こんなに無防備な自分を親以外の人間に見せるわけにはいかない。
「また掛かってきてるよ」
「ちょっと待ってよ」
誰に待ってと言っているのだろうかと自分で自分を訝りながら私は大急ぎで眉ペンを操った。化粧というものはいつもの鏡、いつもの角度、いつもの明るさが揃わないとしっくりこない。ここのところよくこのホテルを使っているので部屋の明るさや鏡にも随分慣れてはきたのだが、今は慌てて描くからどうしても上手にいかない。角度も悪ければ左右の長さも釣りあわない。私はやっつけ仕事で出来上がった自分の顔に舌打ちしつつ、室内の薄暗さにすがるような思いで鏡の前から離れた。
私は少し前屈みになり髪でできるだけ自分の顔を覆い隠しながら鞄の前に立った。携帯電話はまだ鞄の中でぶるぶる震えている。
「バスローブが色っぽいね」
「馬鹿」

手探りで震源を掴み出し画面を開くと着信は「千絵」となっていた。私はちらっとベッド上の男を見た。彼はベッド上に毛布から裸の上半身を露わにして煙草を燻らしながらこちらを見ている。私は電話を耳に当てた。

「もしもし？どうしたの？千絵」

私は「千絵」の語勢を強めた。もちろん電話の向こうの千絵に言っているのではない。先ほどまで私をその腕の中に抱いていた杉田に対してだ。「千絵」という名前を聞いて杉田がわずかに眉根を顰めたのを私は見逃さなかった。

「郁子。今、電話しててもいい？」

「いいわよ。何かあった？」

これだけ執念深く掛けてこられては適当にあしらうわけにもいかない。それに電話越しの千絵の声にはいつもと違う張り詰めた緊迫感とシリアスな重さがある。こんな風に千絵に話しかけられては聞かないわけにはいかない。

「別に急用って言うわけじゃないんだけどね、ちょっと気になることがあって」

「だから、何？おかしな千絵ね」

私は軽薄に笑ってみせた。千絵のペースに引きずり込まれてはいけないという防御本能が私の中で働いている。何かが起こりそうな予感があった。私の歓迎しない何かが。

「圭介君のことなんだけど・・・」

「圭介？」

私は張り詰めていた緊張の糸が音を立てて緩むのを感じた。てっきり杉田との関係を詰問されるのだと覚悟していたからだった。千絵の口から杉田の名前を聞いたことはない。しかし今の杉田の様子を見れば千絵と杉田との関係は一目瞭然だったし、思い返せば納得のできることばかりだった。千絵は私が就職したことを知ったのも異常に早かったし、やたらと信用金庫内の話題に詳しかった。

初めに誘いに乗ったとき私は杉田と千絵の関係には気付いていな

かった。だから杉田とのことはその日の気分に任せた一度限りの思い出にしようと思っていた。しかし知ってしまった今となっては杉田を手放すわけにはいかない。そして私はここ半月を二日に一度程度のペースでこのホテルに杉田と来ている。杉田はスタミナのある男だ。私は骨の髄までしゃぶられているような気分だった。

千絵の彼氏を奪った。今、私はかつて味わったことのない名誉に浴している。所詮圭介は当時千絵とは付き合ってはいなかった。圭介を落としたときとは比べ物にならないほどの高揚感が現在の私を包んでいる。他の男が相手ならこれほど身体を求められると嫌気が差してしまっていただろうが今回は違う。杉田が求めてくればくるほど私は濡れてしまう。杉田に、君は最高だ、と耳打ちされたときの恍惚と言ったらない。もうこのまま殺してと何度叫んだことだろうか。

「郁子、圭介君と喧嘩でもしたの？」

「え？どうして？」

「だって、圭介君、最近元気がないみたいだから」

最近元気がない？どうして千絵が圭介の元気具合に詳しいのか。

「最近」の話ができるということは「以前」の圭介も知っていることになる。やはり私の知らないところで千絵と圭介は会っていたのだ。それも一度や二度の話ではない。

「圭介君を大切にしてあげて。郁子の何気ない言動が圭介君を傷つけてることもあるのよ」

「千絵は優しいのね」

「そんなことないけど・・・。圭介君が落ち込んでるのを見るのはつらいの」

それはまだ圭介のことを忘れられないってことなの？と訊きたくなるのを私はぐっと飲み込んだ。千絵と喧嘩をする必要などどこにもない。今、優位に立っているのは千絵ではなく杉田を勝ち取った私なのだ。

「圭介が何か言った？」

私の質問に千絵は曖昧に否定した・

「圭介君は何も言わないわ。でもなんとなく分かるのよ。郁子、最近圭介君と会ってないんでしょ。電話にも出ないんでしょ？」

圭介が何も言わないのならどうしてそこまで分かるのだ。圭介は千絵に私のことであれこれ相談したのだろう。結婚を申し込んだら相手にされなくなったとでも言ったのだろうか。女々しい男だ。

「ねぇ郁子。圭介君の他に好きな人ができたの？」

私は答えなかった。どうして千絵にそんなことを答えなくてはいけないのだ。しかも圭介のことは初めから愛していない。

「ねぇ、そうなの？他にいるのね？それって・・・もしかして私の知ってる人？」

これだ。

千絵が不安だったのは圭介のことではなく自分自身のことなのだ。私が圭介を避けているように千絵も杉田に避けられている。そのタイミングや杉田の女癖の悪さから私と杉田との関係を想像することも不可能ではない。

「私の知ってる人？職場の人なの？」

千絵の声がヒステリックに上ずっていく。完全に疑心暗鬼になっているのだ。そしてその疑いは的を射ている。

「違うわ。千絵の思い過ごしよ。年末に向けて今は忙しい時期なの。ただそれだけのことよ」

「ねぇ。信用金庫って今が忙しいときなの？みんな彼氏や彼女に電話を掛ける暇もないぐらいなの？」

「そうよ。もうみんなてんやわんやなんだから」

「そう」

千絵は幾分満足そうだった。私が忙しいということは杉田も忙しいということだ。だから杉田からの連絡もない。それは仕事なんだから仕方がない。電話を切った今、千絵はきっと安心して胸を撫で下ろしているだろう。邪推した自分が愚かだったと自戒しているかもしれない。

「圭介って誰だよ」
電話を鞄に仕舞うと同時に咎めるような声を浴びせられてようやく私は今ホテルで杉田と一緒にいるのだということを思い出した。どうやら杉田は圭介に嫉妬しているらしい。杉田の冷たい視線が私の心を重くする。
「誰でもないわ。ただの友達よ」
私は千絵とのやりとりでひどく疲れていた。もう誰とも口を利きたくない。このまま何も考えずに眠りたい。しかし杉田はそれを許してはくれないようだった。不恰好な眉を直すために洗面台に向かう私の背中に非難めいた言葉を投げかけてくる。
「それで信じろって言うのかよ」
「あなたこそ千絵とはどういう関係なのよ」
私は口にするまいと思っていた言葉を反射的に投げ返していた。

17

私の目の前で圭介は小さくなって座っている。顔色は良くないし肌もかさかさしている。ちょっと見ないうちに圭介は完全にやつれていた。その原因が私にあるのだと思うとさすがに気が咎める。

「ごめん。急に呼び出したりなんかして」

私は昼休みにコンビニで買ったサンドイッチを食べているときに電話で圭介に呼び出されたのだ。圭介は私の携帯電話にではなく職場に掛けてきた。これではさすがに出ないわけにはいかない。

「いいのよ。ちょうどコーヒーも飲みたかったし」

私はコーヒーがなみなみ注がれている手元のカップを見つめ、そういえばこのドーナツ屋で同じような風景を見たことがあるなと思い出していた。もうどんな顔をしていたかも思い出せないが宮本は今頃何をしているだろうか。あの男も冴えなかったが、眼前にいる圭介も今日はひどく冴えない顔をしている。

「結婚の話、重かったよな。俺、郁子のこと考えずに一人で突っ走っちゃって」

圭介はまた小さく、ごめんと頭を下げた。

「そんなに何度も謝らないで。圭介は何も悪いことしてないわ。きっと私が我儘なだけなの」

圭介は私の言葉に不安げな表情を示した。迷子の子供のように怯えた目をしている。次に私に別れを切り出されるかもしれないと案じているのだ。可愛そうな圭介。

私は昨日の杉田とのやり取りを思い出していた。売り言葉に買い言葉で言った「千絵とはどういう関係なのよ」に対して杉田は意外にも簡単に千絵との関係を認めた。私は驚いた。プレイボーイの杉田のことだから曖昧にお茶を濁すだけで逃げられると思っていたからだ。

「千絵とは別れる。君のことを愛しているんだ。だから他の男の名

前を君の口から聞くと僕は大人気なく嫉妬してしまうんだ」
　杉田にここまで言われて私はくすぐったいような気持ちになった。胸が熱くなって私は矢も楯もたまらずにまっしぐらに杉田の胸に飛び込んでいた。杉田の腕に抱きとめられて私はこれが人を愛するということなのかもしれないと感動していた。
　しかし私の臆病な心は圭介を手放すことを怖れていた。ここで圭介と別れたら、私に振られた圭介と杉田に捨てられた千絵とがお互いの傷を舐めあうように付き合い始めるかもしれない。もともと千絵は圭介のことが好きだったのだ。考えられないことではない。そして私はそれを想像しただけで血の気がひく思いがした。千絵を愛している男を私に振り向かせることはあっても、私を好きだと言う男が千絵と付き合うことは許せない。もし圭介と街で偶然出会ったとして圭介が私に見向きもせず千絵と手を繋いでその場を去っていくようなことがあったとしたらその屈辱たるや耐えられるものではない。
「私、今までどおり圭介と付き合っていたい。結婚したいって言ってくれたのは素直に嬉しいわ。でもそれって今すぐじゃなきゃだめなの？私、最近漸く仕事が楽しくなってきたところなの。それに私が帰ってきて賑やかになったって両親も喜んでるわ。昔は大嫌いだったこの寂れた街も少しずつ好きになってきてる。私、もう少しこのままの状態を味わっていたい。今の充実感をまだ手放したくないの。結婚のことを考えるにはもうちょっと時間がほしいわ」
「いいよ。俺が先走りすぎたんだ。郁子の俺への気持ちが変わってないんなら今のままでかまわない」
「私、圭介への気持ちは変わらないわ。だから・・・だから、もう千絵とは会わないで」
　私は圭介を店に残したまま満足して職場に戻った。一つの嘘もつかずにそして圭介の気持ちを害することもなく自分の言い分を全て通すことに成功したのだ。全てが上手く運んでいる。手を伸ばせば欲しいものが何でも手に入る。そんな気分だった。

しかし化粧を直してトイレから出たときに私を待ち構えていた杉田の顔を見て私は幸せを製造する機械のまた別の歯車の一つが止まってしまったことを察知した。それほどそのときの杉田は冴えなかった。

杉田は苦渋に満ちた顔で私を屋上に連れ出した。レモンを齧ったときのようなそのしかめっ面に私の口腔には唾液が溢れてくるようだった。いつもの思わず見とれてしまうような美しい笑顔で歯の浮くような殺し文句を並べる杉田はどこへ行ってしまったのだろうか。こんな顔の杉田は見たことがない。今圭介と会ってきたことを咎められるのかもしれないと思ったが、杉田の目には怒りがないことに気付き私はその考えを捨てた。杉田は私に何かを告げようとしている。私を一撃で絶望の淵に突き落とす致命的な何かを。

屋上の風は身を切り骨を痺れさせるほどに冷たかった。空にはのっぺりとした禍々しいほど鉛色の雲が低く垂れ込めている。この寒さは初雪を予感させる。痛いほど重い凍てつく冬の到来だ。

しかしワイシャツ姿の杉田は首をすぼめるでもポケットに手を突っ込むでもなく吹きすぎる風を全身で受け止めて微動だにしない。事務服の上にカーディガンという軽装の私は自分を抱くようにして小さくなりながら杉田の後ろに控えていた。あまりの寒さにじっとしていられず私は絶えず細かく足踏みをしているのだが私よりも薄着の杉田は先ほどから一言もしゃべらず風上の方角を睨みつけ血の通っていない銅像のように突っ立ったままだった。

こんな場所でしか言えないようなこととは何だろうか。杉田は寒さを全く感じていないようにさえ見える。皮膚の感覚を麻痺させるほど事態は切実なのだろう。そしてそれは私にとって好ましいはずがない。

「思うようにはいかないもんだな」私は黙って次の杉田の言葉を待った。相槌を打つことも憚られるような張り詰めた雰囲気を杉田の背中が作り出している。杉田は私に背を向けたまま風が目に沁みたように俯き加減で言葉を続けた。「良かれと思ってやったことが逆

に自分の手枷足枷となる。欲しいと思っているときは八方駆け回っても手に入らないのに、いらないときに限って頼んでもないのに向こうから転がり込んでくる。皮肉なもんだよ」
「そんなのあなただけじゃないわ。誰もがそう思ってるわよ」
勘弁して欲しい。感傷的になるのは勝手だが、人の迷惑も考えてもらいたい。泣き言ならいくらでも聴いてあげるからせめて建物の中にしてよと私は杉田の風にはためく衣服を恨めしく眺めた。
「三か月らしい」
杉田は何かを諦めたようにため息交じりにぼそりと言う。
「何が、三か月なのよ」
「子供ができたんだ。三ヶ月になる」
振り返った杉田は寒さのせいか青白い顔をしている。笑おうとしているのかもしれないが引きつって歪んだその表情はこちらが泣きたくなるほど不細工だった。
私は至極冷静に杉田の言葉を理解していた。そして私は眼前に立つ醜い男に確認しなければいけない事項がいくつもあった。
三ヶ月前は誰とどこでセックスをしていたのか。私とのセックスと何がどう違ったのか。そのまだ意思を持たない小さな生命体をどう扱うのか。そのちっぽけなものと私とどちらがどうなのか。相手の女と私とどちらがどうなのか。
しかし寒さに凍って弾力を失った唇は私の意思に反して死んだようにぴくりともしない。結果として私の顔は失恋女のすがるようなそれになっていたかもしれない。
「俺と・・・俺と千絵との子供だ」
それだけは言って欲しくなかった。そんなことは分かりきっている。分かりきっているだけに最後まで知らない振りをしておきたかった。
「俺は千絵と結婚するよ」
「馬鹿じゃないの」
我ながら愚にもつかない捨て台詞を残して私は屋内に駆け込んで

いった。完全に私は負け犬だった。
馬鹿じゃないの。
一体誰が馬鹿なのだろうか。捨てたはずの女に知らないうちにこの世で一番破壊力を持つ武器を与え自分は丸腰で従順の印に諸手を挙げてしまう杉田なのか。自分を捨てた男の子種を身に宿し、それを利用してでも男を我が物にしようとするなりふりかまわない千絵なのか。全てを手に入れたと思い込み結局全てを失いつつある私なのか。
良い機会なのかもしれない。これで私は千絵の呪縛から逃れることができるだろう。やはり私は千絵に勝つことはできないのだ。今回のことでそれははっきりした。私に残された道は諦めることだけだ。私には圭介がいる。それだけで十分だ。今からでも間に合うだろうか。
私は携帯電話を手に走り出していた。
まだ圭介は遠くには行っていないはずだ。仕事なんかどうでもいい。このまま圭介を追いかけてホテルに行き圭介の全てを私は手中にする。私は圭介と結婚するのだ。圭介に突かれながら結婚してと哀願しよう。跪いて圭介の性器を銜えながら上目遣いで嘆願してみよう。私は幸せになる。これから醜く腹の膨れていく千絵よりもはるかに幸せになれるのだ。

二人の終わり

驚きだった。舞い戻ったドーナツ屋に千絵がいたのだ。彼女は圭介の向かい側に座り圭介と何か喋っていた。親しげに見えるその様子に私の理性が大きく揺らいだ。

どうして？あなたには杉田がいるじゃない。私から杉田を奪い、今は圭介まで取ろうとしているの？

私はつかつかと二人に歩み寄った。圭介は私のもの。私のものなのよ。

「どうして千絵がここにいるのよ！」

私は口から迸る声を抑えられなかった。二人の顔を交互に見下ろす。

昼時を過ぎても七割がた埋まっている店内の人間が一斉にこちらを見る。それが分かっていても私には自分を抑える力がなかった。

「郁子」

千絵の目は驚いていなかった。ましてや笑ってもいない。どこか悲しげに私を見上げていた。そのことが私の心にさらに動揺を与える。千絵の落ち着きはまるで私がここに戻ってくることを知っていたように見える。不気味だった。私は千絵の目に自分の目を合わせることができなかった。

必然、私は怒りの矛先を圭介に向けた。

圭介は亀のように首をすくめ小柄な体をさらに小さくしている。

「千絵には会わないでってさっき言ったところじゃない！」

心という私の一部分は怯んでも身体全体の勢いは止められない。声のボリュームのつまみが取れてしまったのだ。私の声は自分でも嫌になるぐらいキンキンとドーナツ屋の中に響いた。

「すまない、郁子。郁子を怒らせるつもりはなかったんだ。ただ、その・・・」

「何？聞こえない。はっきり言いなさいよ」

圭介は私を見返すこともできず視線を左右に落ち着かなく動かすだけだった。唇が青ざめて微かに震えて見える。その追い詰められた小動物のような様子が私のサディスティックな部分をさらに煽る。

「ほんと、信じられない！」

私は力任せに平手で強くテーブルを叩いた。

圭介と千絵のコーヒーがコップの中で波打ち零れる。ソーサーに乗っていたスプーンがテーブルの上でキラキラと跳ねる。

私は踵を返して二人に背を向けた。これ以上圭介を打ちのめすと圭介の私への気持ちが萎えてしまいそうだった。とにかく、ここには邪魔者がいる。これからのことは圭介と二人きりで進めていかなくてはならない。

「信じられないのはあなたよ、郁子」

千絵の声は重く私にのしかかってきた。両肩をがっしりと抑えつけられたような感覚があった。その落ち着きに私は確実に不利な何かを握られていることを覚悟するしかなかった。しかし、ここで退くことはできないとも思った。彼女が持っている武器が何かを知らなければそれに打ち勝つことはできない。私は背中に負った重圧をはねのけるように懸命に振り返った。

「何のことよ？」

「何のことですって？冗談じゃないわ」私と同じように千絵はテーブルを叩いて立ち上がった。彼女の目は見たことのないような力強さを示していた。彼女は怒っていた。私以上に怒っていることが分かった。「あなたがここに戻ってきたことが全てを物語ってるじゃないの」

千絵と私は睨みあった。

私がここに戻ってきた理由？

私は圭介がまだこの店に残っている可能性に賭けたのだ。圭介がいれば圭介との結婚を了承し、その証として今すぐホテルへ行って身体を重ねるつもりだった。

そのことが何を物語っていると言うのか。

千絵の顔。頬が幾分か紅潮し、目は幾らかつり上がっている。きっと私も同じような表情をしているのだろう。私たちはこんなときでも似通っている。

「ここに帰ってきたってことはあなたが徹ちゃんを私から奪うのを諦めたってことでしょ？徹ちゃんと私が結婚するから圭介君とのよりを戻すつもりだったのよ」

私は杉田が徹という名前だったことを思い出していた。

図星をつかれて私は即座には切り返せなかった。きっと顔にも動揺の色が出てしまっていただろう。

はめられた、と思った。

先ほど私が圭介と会っていたとき、千絵も杉田を呼びだしていたのだろう。そして妊娠を告げた。杉田は観念して千絵との結婚を誓い私に別れを持ち出した。圭介も千絵に唆されてここいるに違いない。私がどういう反応を示すか見届ける証人の役を圭介がやらされているということか。

「罠だったのね」

漸く絞り出した言葉は私自身をさらに窮地に陥れることになる。

「罠？」

顔を起こした圭介は私と千絵を見上げた。

「圭介君。落ち着いて聞いて。この女はね圭介君と付き合っていながら私の彼と関係を持っているのよ。だから圭介君との結婚を渋ってたの。だけど私の彼がこの女を捨てたから今のこのことここに舞い戻ってきて圭介君と結婚しようとしているのよ」

圭介が事実を知ってしまう以上に千絵に「この女」と呼ばれることの方がショックだった。千絵に捨てられたことを悟った瞬間だった。もう千絵の傍で生きていくことは許されないだろう。千絵を見つめ千絵の真似をし千絵と生き写しになることを願い千絵を上回ることを生きがいにしてきた私の人生はどうなってしまうのか。そう考えると目の前に幕が下りたような黒色の気分になる。

「郁子。本当なのか？」

弱々しい声で私に訊ねる圭介にどう答えたものか私は迷っていた。
千絵が杉田と結婚する以上、同等の立場を手に入れるには私にも夫となる人間が即座に必要だ。それは圭介しかいない。圭介の気持ちが私から離れないようにするにはどういう言葉を選べば良いのか。千絵の言葉を認めここで土下座をすれば許されるだろうか。それとも真っ向から千絵を否定し罵倒して圭介の手を握ってこの場から取りあえず立ち去るべきか。
「圭介。あのね・・・」
沈黙だけはまずいと思って口を開いたが、その後が続かない。
いっそここで圭介も捨てて全てを御破算にしてしまった方が楽かもしれない。千絵の攻撃をかいくぐり失地を回復する機会が私に訪れるだろうか。
考えあぐねているうちに頬を何かが伝って落ちていった。
涙だった。
そうか。女にはこの手があった。これで取りあえず考える時間を稼ぐことができる。私は自分の顔をまっすぐ圭介に向けた。
「郁子」
圭介は私の涙に驚いたようだった。この反応ならまだ脈はある。
「圭介」
私は涙声で彼の心を手繰り寄せようとした。
しかし、それを千絵が許さない。
「圭介君。この女の安い涙なんかに騙されちゃだめよ」
千絵は今日私から全てを奪うつもりのようだ。彼女の声には今完膚なきまでに叩いておかないと後悔するという切迫した響きがあった。
もう私は千絵との関係を修復することはできないだろう。彼女は永遠に埋めようのない深いクレバスの向こう側にいる。
千絵のことが好きだったのに。千絵のことばかり見つめていたのに、私は足元に亀裂が入っていることに気が付いていなかった。
「千絵ちゃん。取りあえず座ろうよ。一体何がどうなってるのか俺

にはさっぱり。郁子もほら」
私は圭介に引っ張られるままに力なく椅子に腰を下ろした。圭介は次に千絵の方も座らせようと手を伸ばす。
千絵は邪険にその手を振りほどいて私を指差した。
まっすぐに強く私を見つめる千絵は怒りの頂点に達していてその表情はどこか歪んで見えた。千絵はかつての私が愛した圧倒的な美しさを失っているようだった。三角に縁取られた濁った瞳。無様に紅潮し強張った頬。わなわなと奇妙に震える唇。
千絵はこんな顔をしていただろうか。それともここにいるのは千絵の姿を装った全く別の人間か。少なくとも私はこんな女を求めてはいないし、真似をする気にもならない。
「それだけじゃないの。この女はね、母が私と結婚させたかった宮本っていう人とも寝たのよ。そうやって私から全てを奪おうとするの。徹ちゃんや宮本さんだけじゃないわ。圭介君。あなたがこの女と付き合うようになったのも元々は私があなたを好きになったことに感づいたこの女が私と圭介君の間に割り込んできたのよ」
千絵は全てを知っているようだった。いつから気付いていたのだろうか。大方あの愚鈍な宮本が私と寝たことを千絵に知られてしまったのだろう。それとも宮本を私に引き合わせたのも郁子の計略だったのかもしれない。
圭介が私をじっと見つめてくる。その目が「本当なのか？」と訊いている。
私ができたのは懸命に首を横に振ること。そして次から次へと涙をこぼすこと。無駄な言葉を発してしまえば嘘になる。私はこの場の取り繕いだけに専念した。これだけのことを言われて圭介が何も調べないはずがない。そしてちょっと本気で探れば私の不行跡など簡単に明らかになるだろう。そうなれば圭介との関係もおしまいだ。さよなら、圭介。
「気持ち悪いのよっ！これ以上私に絡んでこないで」
店中に響く声で千絵にそう罵倒されて私はゆらりと立ち上がった。

千絵の言葉に驚いて目を見開いている圭介に向かって一度まぶたを閉じ涙をこぼしてから踵を返し二人に背を向けた。
店内の人間がこちらに向けていた顔をサッと伏せる。それはまるで訓練されていたような乱れのない鮮やかな動きで、彼らも千絵のキャスティングなのではないかと疑ってしまうほどだった。
「子どもなんかできてないくせに。嘘つきね」
私は千絵にだけ聞こえる小声でそう残して席を離れた。
私なりの決別の宣言だ。千絵を失って、これからのあてはない。しかし、もう千絵にこだわる気持ちもない。
妊婦が、しかもそのことを結婚の決め手に使ったような人がドーナツ屋でコーヒーを飲むはずがない。
そんな浅はかな千絵に騙されてしまう杉田も杉田だ。そんなつまらない男、別れることができて清々する。
ドーナツ屋の自動ドアが開く。空は先ほどの鉛色の雲が嘘のように晴れ渡っていた。柔らかな日差しが私の足元を照らしている。冬晴れの温かさは心を浮足立たせる。私は軽やかに新たな一歩を踏み出した。
そのとき何かが背中にぶつかった。私はその勢いに弾き飛ばされるように道路に突っ伏した。顎を歩道に打ち付けあまりの痛みに目の中で星が飛び散る。
「私は嘘つきじゃない。嘘つきはあなたよ！」
うわあああ。
獣のような叫び声をあげて私の背に馬乗りになっているのは千絵だった。目を血走らせ唾を吐きだしながら夜叉の形相で彼女は私の背中に腕を何度も振り下ろしている。また振り上げた彼女の拳に銀色に光るものが見えた。その先端からは赤い液体が滴り落ちている。
あんなに美しかった千絵も醜い鬼に変わってしまっていた。
醜い千絵など見たくない。美しい千絵が好きだったのに。
私はゆっくり目を閉じた。身体の感覚が麻痺していく中で、自分の意思で目の前の景色に蓋をした。まぶたに浮かんできたのは靴を

隠され涙に濡れた小学三年生の千絵の姿だった。千絵を抱きしめた感触が腕に蘇り、次第に薄れていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0731v/

女病

2011年9月14日03時32分発行